

---

Is she a parasitic worm?

福岡留萌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

I s s h e a p a r a s i t i c w o r m ?

### 【Nコード】

N 0 3 9 0 P

### 【作者名】

福岡留萌

### 【あらすじ】

家族みんなが同時刻に逝ってしまった。そんな中、ただ一人残された存在。  
それが僕。

アイカさん。  
僕同居人。

僕らの存在なんて、世界にはなんの影響も与えない。そんなことは痛いほど理解している。

だけど。だけどだけどだけど。

それでも、例えば

世界の片隅で呼吸をするくらいは、許してもらってもいいだろう？

S h e c o m e s o v e r a g a i n t o m y h o u s e . (前書)

モバゲータウン（現エブリスタ）でも同じ名義で書いています。興  
味があれば是非よろしくお願いします。

母親の作る一番好きな食べ物はないか、なんてことを尋ねられたら、僕は迷わずチャーハンと答えるだろう。そして、その答えを聞いた人々は、哀れみを込めた目で僕を見るのだろう。たしかにチャーハンってのはそれほど気合を入れて作るものではないので、肉じやがだとか卵焼きだとかそういった所謂「おふくろの味」ランキングで上位に入る料理より下に見られることが多い。

だけど。だけどだ。それでも僕はチャーハンが好きなのだ。他の誰のものでもない、お母さんの作るチャーハンが好きなのだ。

まだ小さかった頃、僕はなかなかの偏食家で、チャーハン以外のものは口にしたくなかった。今はそんなことはないけれど、あの頃はそれこそ三食プラス三時のおやつが全てチャーハンでもいいと真剣に思っていた程だった。

そんな僕に、お母さんはよくチャーハンを作ってくれた。それしか食べないから、なんて理由をつけて　そして口では「しょうがないわねえ」なんて言っていたけれど、実際お母さんは、自分の作ったチャーハンを美味しそうに僕が食べるのが嬉しかったのではないかと思う。そんなものはただの思い込みで、お母さんは本当に困っていたのかもしれないけれど、でも僕はそう思うことにしている。なんてことはほんとうはどうでもいいのだった。

昼休みのことだ。隣の席に座るヤマダ君が声をかけてきた。

「そういや、コノウチって一人暮らしなんだっけ」

羨ましいよなあ、と彼は言った。そして、ウチなんか妹が三人いるからうるさくてしかたがないんだ、と続ける。僕はそんな声を聞きながら、食べ終えたパンの袋を制服のポケットに突っ込み、それから口を開いた。

「確かに僕は、親元を離れて生活しているけど、でも、」

「一人暮らしってわけじゃない」

「え、そうなの？」

「うん」

昨日までは一人だったんだけどね、と言うと、ヤマダ君は不思議そうな顔をした。

「どういうこと？」

「帰ってきたんだ」

「誰が？」

アイカさんが帰ってきたのは、昨晚遅くのことだ。その頃外はひどい雨で、テレビが豪雨に注意しろ、としつこく繰り返していた。

あと一時間で日付が変わる、という頃になって、不意に部屋の扉がノックされた。その音は、外の雨音にかき消されてしまいそうなものだったけれど、しかし僕の耳にははっきりと届いていて、それに気づいた僕は迷うことなく玄関を開けた。

ずぶ濡れになったアイカさんが、立っていた。

彼女の瞳はまるで捨てられた子犬みたいで、それが妙に可愛いのだ。

だから、僕は彼女にこう声を掛けた。

「おかえりなさい」

なんてことをヤマダ君に言うのは気が進まなかったし、仮に言っただとしても説明不足なのは否めないなので、僕は適当に誤魔化しておいた。

「うーん、なんだろう」

アイカさんのことを、うまく説明する言葉が思い浮かばない。

「しいて言うなら……、」

寄生虫かな。僕がそう言くと、ヤマダ君はやっぱり不思議そうな

顔をした。

「お前、寄生虫と暮らしてんの？」

「まあ、そうなるかな」

それから、

「僕にも妹がいたんだよ」

どうでもいいことだけどさ。

授業を終えて、自宅へ向けて歩き出す。玄関と押入れと台所とトイレとテレビがあるだけの、安アパート。と、そういえば家にはアイカさんがいるのだったと思い出したので、スーパーへ寄ることにした。

店内に入り、カゴを持って商品を物色。今までは適当な食事でも何の問題もなかったのだが、アイカさんが居るとそうもいかない。彼女は家事なんて何一つできないくせに、食事はバランスがどうだとか、コンビニ弁当ばかり食べていたら体に悪いだとか、そういったことをやかましく言うてくるのだ。だから僕は、彼女が居る間にはなるべくきちんとした食事を作り、それを食べる必要があった。

ああ、そういえば今朝は朝ごはんを用意しないで出てきちゃったな。アイカさん怒ってるかな。お腹を空かせてるかもな。ケーキでも買っていつてやろうかな。財布にはまだお金がそれなりに入っていたはずだし、それに財布にはなかったとしても心配することはない。

僕には文字通り腐るほどのお金があった。

そういえば、今度はいつまで居るんだろう、アイカさん。

「……」

考えたって仕方がない。玉ねぎをカゴに入れる。

ただいま、と玄関を開けると、下着姿でアイカさんが仁王立ちしていた。

「えー……、と」

怒ってます？ 尋ねると、彼女は首を横に振った。

「怒ってない」

「いやいやいや」

完璧に怒ってますよね。だけどアイカさんは、全然怒ってないよ、と繰り返した。

「朝ごはんの用意もせず学校に行きやがってとか、お腹空きすぎて頭が変になりそうとか、帰ってきたらとっちめてやるとか、そんなことは全然考えてなかったから」

「僕は今、自分の生命の危機を感じているわけですが」

朝ごはんを用意せずに出かけてしまったのは悪かったです、と僕が頭を下げたが、しかし主張したいこともあるのだった。

「だけどそれは、アイカさんが夜遅くに帰ってきたからで、そのせいで僕の起床時刻が遅くなったわけで、遅刻寸前だったわけで、」

そんな僕の必死の主張は、アイカさんの一言で停止させられた。

「だから？」

「いや……、なんでもないです。すいません」

再び頭を下げた僕は、お詫びと言ってはなんですが、と前置きしてから、途中で寄ったケーキ屋の箱を差し出した。

「好きでしょ、ショートケーキ」

「……覚えてたんだ」

そりゃあ、まあ。

「忘れるわけじゃないですか」

アイカさんは俯いてしまった。ひよつとたら泣いているのかもしれない。僕はそんな彼女に、あえて明るく言った。

「食べましょう、一緒に」

アイカさんは、いつも苺を最後まで残す。好きなものは最後まで残しておく主義らしい。

久しぶりの再会でも、それは変わっていなかった。

「やっぱり、最後まで残しておくんですね」



「そういう君は、さつさと食べちゃうんだね」

変わってないね、と彼女は言った。お互いに、と僕は返す。そして、

「今度は、

いつまで居るんですか？

いじわるだなあ、とアイカさんは寂しそうに笑う。

「答えられないって、わかってるくせに」

彼女は依代を探している。見つければ、また僕の元を去っていく。そして、僕はそれを止めることができない。

そういう関係。出会った時から今まで、それは何一つ変わらない。きっとこれからも。正しいのか、それとも間違っているのか。さっぱりわからないのだけれど、でも、今は。

このままでいいと思っている。

ケーキを食べ終えて僕は食器を洗うために台所へ向かった。洗い物はそれほど溜まっていなかったので、必要とした時間はせいぜい五分程だったと思う。その間、背後からはテレビの音が聞こえてきていたので、てっきりアイカさんはテレビを見ているものと思っていたのだが、

「……寝てるし」

僕が台所を離れた頃にはすでに、彼女は気持ちの良さそうな寝息を立てていた。ずいぶんと幸せそうな顔で、というおまけ付きだ。

まったく。意図せず溜息がもれる。この人の寝付きの良さも、相変わらずだ。

気持ちの良さそうな寝息、幸せそうな顔。それらを見て、このまま寝かせておこうかとも考えたのだが、

「アイカさん、少しの間でいいから起きてくださいよ」

布団を敷いてあげますから、と呼びかけてみたのだが、しかし彼女からの返事は、ううん、とか、ああう、とかそういった要領を得ない、というより寝言のみであった。

やれやれ、どうやら起きそうもないなこりや。まったく困ったもんだ、あんた一応大人だろうがよ、とか色々言いたいことはある。そのはずだったのだが、

「……………」

そんなアイカさんの隣に寝転がる僕は、どうやらそれなりにイカれた頭を持っているらしかった。いやまあ、自覚はあったけれど。

上半身だけを起き上がらせ、アイカさんの寝顔を覗く。ほんの少しだけ開かれた口から、なにやらしい匂いのする吐息が漏れていた。「……アイカさん、あんた、

美人ですよ。

もちろん返事はない。わかっちゃいたけどさ。だからとくにどうということもない。事前に誰がどこでクラッシュするか把握してから見るF1中継みたいなものだ。

だけど、今日はどうもそれじゃあつまらなかった。

なんとなく。

だから、言ってみたのだ。

「ちゅー、しちやいますよ」

言い終わってから、アイカさんが飛び起きたらどうしようと考えた。例えばアイカさんが、今の僕の発言を聞いていたとして。そして飛び起きたら、どんなことを言うのだろう。いや、ひょっとしたらなにも言わないかもしれない。だけどただけど、なにかが、確実になにかが起こるはずだ。そしてこれは非常に驚くべきことなのだが、僕はそんな「なにか」が起こることを期待しているみたいだった。

だけど、そんな僕の思いに反して、アイカさんが起き上がるなんてことはなく。

結局は、くーくーと可愛らしい寝息を立てるアイカさんと、そんな彼女を眺める僕だけが、部屋の中にいた。

がっかりですかね？　すぐがっかりですかね？　うるさいよ馬鹿、がっかりなんかしてないよ。何故？　何故ってお前……なんで

だ？

「嘘ですからね、嘘。軽いジョークだから、気にしないでくださいよ」

そんな僕の声が部屋に響く。それに対する返事は、特に無し。

うーん、これはちよつと虚しいぞ。

なにをやっているんだ、と自分に呆れながら、僕は立ち上がった。なにをするでもないが、特に寝たいというわけでもないのだ。

まあ、あれだよ。いい加減に、

「飽きてたんだよな、うん」

自分を納得させるために呟いたはずのその言葉で、僕は余計にわけがわからなくなりましたとき。ああもうくだらない。そんな言葉で納得できるだなんて思っている自分が一番くだらない。下らなすぎてあくびが出るね！

結局アイカさんが目を覚ましたのはそれからたつぷり二時間は経った頃で、一般的に夜と呼ばれる時間帯にすっかり突入してしまっていた。

「んむう……、おはよ」

おはよ、じゃないよ。

「寝過ぎです」

アイカさんは窓の外を見て、あらあらすっかり夜だわと他人事のように呟いた。だから寝過ぎだつて言つてんだろがよ。

「ごめんね、こんなに寝るつもりはなかったんだけどね」

「……まあいいですけどね」

やれやれ、こんなふうに素直に謝られちゃうとやっぱりちよつと困る。たしかにアイカさんは寝過ぎつてほどに寝てしまったわけだけれど、でもそれは、そんな状況にさせてしまった僕にも責任があるわけで、つまりはアイカさん一人が悪いわけではないのだ。

「とにかく」僕はアイカさんに言った。

「これから晩ご飯作りますから。食べられますよね？」

もちろん、と親指を立てられた。笑顔というおまけ付きで。

「ちなみに、今夜のメニューはなにかね？ シェフ」

「焼きそばとなっておりますお嬢様」

「えー！？」

アイカさんの口から漏れたその声は、どうも喜びのそれには聞こえなかった。それはどうも正解だったようで、

「焼きそばかよー」

どうもアイカさんは焼きそばがメニューとして設定されているのに不満を抱いたらしい。

嫌なら食べなくてもいいんですよ。僕がそう告げると、誰も食べないなんて言っただけじゃない、と少々強い口調で返される。

「だけどさあ」

君ってしょっちゅう焼きそば作るよね、とアイカさんが言う。いいじゃないか、僕の得意料理なのだから。

「たしかにおいしいけどさー」

その後もアイカさんはなにやらぶつぶつ言っていたが、それに構わず僕は台所へと向かった。

「うんまーい！」

出来立ての焼きそばを一口、口へ放り込んだアイカさんは、暫しの咀嚼の後そう声をあげた。

「喜んでもらえたんならなによりですけど、」

だけど、さっきまでぶつぶつ言っていた人は誰でしたっけね。僕がそんな問いを投げると、なにを言っているの、そんな人はどこにもいなかったじゃないの、という返事が帰ってきた。くそ、しらばっくれる気だ。そうはさせん

「君の作る焼きそばはいつもおいしいわー」

「……そりゃ、どうも」

くそ、そんなこと言われたらなにも言えないだろうがよ。なんだ、あれか、わかってて言っただけなのか。そうやって僕を手玉に取

るのか。いい気分にさせておいてコントロールするのか。ちくしゅそうはいかんぞ

「あ、お茶注いでちょうだい」

僕は無言でお茶を注いだ。馬鹿か僕は。だけどもあ。

誰かにご飯を作るなんて、久しぶりだな。

またずっと一人で夕食をとる日々を過ごしていた。自分の為に自分で料理をするのが面倒で、外で適当に買ってきた惣菜なんかで済ませる日が多くなっていった。

だから、ってわけじゃあないけどさ。

「ごま油がいい感じで効いてるのよねー。うん旨い」

アイカさんのそんなひと言ひと言が、妙に暖かった。こんな感覚も、随分と久しぶりだ。

「……どうかしたの？」

不意に、アイカさんが僕の顔を覗き込む。あまりに突然のことだったので、僕はかなり驚いて、ななななんですか急に、なんて間抜けな声をあげるはめになった。

「だって、君、

今、泣きそうな顔してたじゃん。

「……は？」

僕が？ 自らを指さして尋ねると、アイカさんは首を縦に振る。

僕が、泣きそうな顔をしていた？ いやいやいや、なんだそりゃ。そんなことあるわけないじゃないかまったくアイカさんはしょうがないなあ。きつと見間違いだ。そうに決まってる。

「そんなことないですよ」

「……そうなの？」

はい。出来る限り明るい声でそう答えた。

「ならいいんだけど」

でも、とアイカさんは続ける。

「でも、なにかあったら、言ってね。その、あの、話ぐらいなら聞

いてあげられるからさ」

なにかあつたら、言つてね。

話ぐらいなら聞いてあげられる。

ありがとう。笑顔と共にそう返事をしたけれど、でもそれは表面上だけで、実際には僕はアイカさんの発言にすこしばかり頭に来ていた。

なにかあつたら言え？ 話ぐらいなら聞いてあげられる？

まったくなにもわかつちやいないな！

例えば僕がなんらかの悩みやら不安やらを抱えていたとして、だ。でもそれは、アイカさんには打ち明けられない。何故かつて？ そんなものは簡単だ。

だって、あんたいつか居なくなつちやうじゃないかよ！

食事の後始末を終えた僕は、アイカさんを銭湯に誘った。

「え、なに、戦いに行くの？」

「面白いと思つてるんですか？」

アイカさんは少しシヨックを受けたような顔で、なかなかいいダジャレだと思つたんだけどなあと呟く。ダジャレって時点でだいぶよろしくないということに気づけよ。

「ほら、近くにあるじゃないですか」

「わかつてるよ。覚えてるよ」

ここに来るたびに出向いているものな。

「じゃあ、行きましょう」

まったく不満だ。なんだって僕の部屋には風呂の一つも付いていないのだろうか。そりゃあたしかに、高いとはいえない家賃設定ではあるけれど、でも、風呂の一つくらいはあつてもバチは当たらないのではないかと思うのだ。

「文句ばかり言わないの」

アイカさんはそんな愚痴をこぼす僕のことを叱った。「屋根があ

って布団があるのに、それ以上なにを求めるの？」

「そりやそうですけど、」

「だけどねえ、銭湯代もバカにならないわけですよ。」

「じゃあ君は、風呂が付くことで、あの部屋が今よりも狭くなっているって言うの？」

「……それは、」

さすがに勘弁かな。

行きつけ　と表現してしまつて構わないだろう、ほとんど毎日通っているのだから　の銭湯、「金の湯」は、アパートから徒歩四分三十秒ほどの所にあつた。住宅街の中という立地のためか、いつもそれなりの賑わいを見せている。

入り口で僕たちは別れた。

「じゃあ」

「うん」

また後で。

いつも思うのだが、この銭湯のお湯は少しばかり熱すぎやしないだろうか。もう少しぬるいと丁度いいのだが。まあそれは僕個人の感想であり願望であるけれど、おそらく八十を越えているであろうじいちゃんなんかが入浴しているのを見ると、お湯の熱さのせいで突然倒れたりしないだろうかとても不安になる。しかしここに来るじいちゃんは皆この程度のお湯なんてへっちゃらしく、ただ黙って浸かっている。そんな姿を見るたび、僕もいつか平気な顔をして入浴するようになるのだろうか、なんてことを考える。まあいつまでもこの街に居るかどうかはわからないけど。

顔中に汗が吹き出すのを感じながら、僕は何気なく女湯の方を見た。もちろんそこには高い壁があつて、その向こうを確認することは叶わない。だけど、そこにはアイ力さんが居るはずなのだった。

アイ力さんが、たった壁一枚向こうで、風呂に浸かっている。

裸で。

「……」

いや、だからどうってことはないんだ、うん。ただちょっと、アイカさんの裸ってのはいつたいどんな感じなんだろうと想像してみただけで、そこにはまったくいやらしい気持ちはなくて

「兄ちゃん兄ちゃん」

突然横から声をかけられた。スキンヘッドのおっさんだった。彼は僕の顔を見ながら、

「顔真つ赤だぞ。無理すんなよ?」

たしかに熱さは感じていたけれど、しかしまだ音を上げるほどではなく、だから僕の顔が赤い理由はきっとアイカさんの裸を想像していたからですよはははは。

なんていうことを初対面の親切なおっさんに言うわけにもいかず、  
「……ありがとうございます」

さっさと体を洗って、上がることにした。

紙パックのフルーツ牛乳を片手に銭湯を出ると、すでにアイカさんの姿があつた。

「相変わらず早いですね」

アイカさんは風呂が苦手、らしい。なんでも子供の頃に風呂で溺れて生死の境をさまよったというのだが、嘘なのではないかと僕は睨んでいる。そんな出来事があつたなんてことは真つ赤な嘘で、そういうことは関係なくアイカさんはただ単に風呂が嫌いなのではないか、と。

といっても、そんな想像は、たったの一言で片がつくというのも事実なのであつた。その一言とは、つまり、「それがどうした」

アイカさんはただ単に風呂が嫌いなのかもしれない。僕に虚偽の思い出を語ったのかもしれない。でも、だからどうした。べつに風呂に入らないと言っているわけじゃない。こうしてしっかり入浴していて、その体からはいい香りが漂ってくる。



「……人の匂い嗅いで楽しい？」

気づくと僕は、アイカさんの体に顔を近づけていた。まるで犬みたいだったとアイカさんは言う。

「……すいません」

「べつに怒っちゃいけないけどさ」

ただ、どうしても謝りたいというのなら、その手の中のフルーツ牛乳を渡せ。まるで小さな子供みたいな笑顔を浮かべたアイカさんが言った。

「ああ、いいですよ」

「へ？」

いいの？ 今度は驚いたような声だった。

「ええ、まあ」

だつてもう一つありますもん。僕が小脇に抱えていた、家から持参した洗面器の中からフルーツ牛乳を取り出すと、

「あるなら先に言いなさいよ」

そう言われてもね。わざわざ伝えることもないかと思ったのだ。

だって、二人で来ているのに飲み物を一つしか買わないなんて、おかしいだろう？

アパートへ向けて歩いていると、並んでいたアイカさんが不意に僕の服を引っ張った。

「寄り道していこうよ」

「寄り道？」

どこへ、と尋ねてみたのだが、アイカさんはいいからいいからと繰り返すばかりで具体的な場所を示すことはなかった。

「僕、明日も学校なんですけど」

「そんなに遅くはならないよ」

やれやれ。僕は溜息を漏らした。もちろん、意図的に。言いたいことは全て言った。けれどそれでもアイカさんが、今のところどこだかわからないその場所へ行きたいというのなら。

それを拒む理由を僕は持ち合わせていない。

「まあ、ありがちっちゃありがちですよね」

目的地へと到着した僕は、そう感想を述べる。冷たい空気。無機質な遊具。点滅を繰り返す街頭。

僕とアイカさんが初めて出会った公園だった。

「いいでしょ。原点に帰る、みたいなさ」

そう言うのと、アイカさんはきゃっきやと声を上げて笑いながら、滑り台へと向かっていった。そしてかんかんかと音を立てながら階段を上った彼女は、滑り台の最上部から僕に手を振り、こう言うのだ。

「君もおいでよ!」

それから手招きなんかしちゃって、まったくもう彼女の姿はとも僕より年上にはみえないのだった。思わず笑ってしまふ。だけどアイカさんはそんなことには気づかず、まだ僕に手を振っていた。かんかんかん、と音を立てて滑り台の階段を上る。そうしながら僕はアイカさんと初めて出会った日のことを思い出したりしていた。

あの日、僕はどうしようもなく沈んでいた。憧れていた一人暮らしってやつを始めることができたけれど、でもそれは僕の望んだものとはまったく困っちゃうほどに違っていたのだ。

その頃の　そして今の　僕は、神様なんてものを信じちゃいなかった。姿を見せないくせに讃えよ崇めよと言っているというのは、永遠だとか愛だとか、そういった言葉と同じく薄ぺらな印象しか抱かせなかったのだ。

だけど　だけどだ。あの時ばかりは、神様ってやつの存在を少しばかり認めてみたものだ。そして、ぶち殺してやりたいとも思っただね。

僕はお母さんの作るチャーハンが好きだったんだ。妹とゲームをするのが好きで、お父さんに釣りへ連れて行ってもらうのも好きだ

った。

だけど。ただとだけとだけ。

全部消えた。

皆、いなくなった。

死んだ。僕だけを残して。

さすがに やりすぎだろう。いくらなんでもそれは駄目だろう。

三人は、まったく別の場所にいたのだ。そして、同じ時刻に三人が三人とも違う原因で死んだ。

出来の悪い映画みたいな内容ですね。まったく糞だな。なにが一番駄目だといって、

僕一人を残したつてのが、一番悪いよ。

愛すべき家族がそれぞれ痛みに苦しみながら息を引き取った頃、僕はのんきに学校の屋上で昼寝なんかをしていやがったのだ。涎まですべしながら、それはもうぐっすり寝ていたのだった。

そんな事実を知ったとき、僕は死にたくなつたね、さすがに。まあ死ななかつたのだけれど。

とにかくまあ、僕はのんきに昼寝をしている間に天涯孤独の身となつていたわけだ。

まったく笑えませんか。

そんなわけだといふ驚いていた僕をさらに驚かせたのは、両親の残した莫大な遺産だった。それは僕一人が生きていくには十分すぎるほどの額で、いったいどこにそんなお金があつたのだらうと思議になつたが、とにかくそれが全て僕に転がり込んでくることになった。

僕はそれまで住んでいた家売り払い、数百キロ離れた田舎町へと引っ越すことにした。

それがつまり、この街つてわけだ。

安いボロアパートを借り、そこへ入居したその日の晩、僕は段ボール箱を持って公園を訪れた。雪がしんと降る、そんな夜だった。

公園の中心へと辿りつく、僕は段ボール箱を逆さにして、中に入っていたものをぶちまけた。

妹とよく遊んだ家庭用ゲーム機とそのソフト、お父さんから貰った釣竿、などなど。

それはつまり、僕と家族の思い出だった。

僕はポケットからジッポオイルとマッチを取り出す。オイルをその思い出たちに振り撒き、そして火の付いたマッチを

「ねえ、」

なにしてるの。後ろからそんなふうに声をかけられて、僕が随分と驚いた。指先からマッチが落ちる。

まさか警察官だろうか。だとしたらそれはまずい。非常にまずい。相当にまずい。だって、僕がその時行おうとしていたことっていうのは決して褒められたことではなくて、よくはわからないけれどもと犯罪行為で、

「燃やしちゃうの？」

ぐだぐだと考えていると、いつの間にか一人の女性が僕のぶちまけた思い出たちをしゃがみ込んで眺めていた。声から考えるに、どうもその人が先程の正体らしい。服装を見れば、ごく普通のスーツ姿で、とりあえず警官ではないらしいことに僕はとても安堵した。

「もつたいないね」

なんで？　なんか理由でもあるの？　その女性は立ち上がって僕に尋ねた。なんで見ず知らずの人にそんなことを答えなけりゃいけないんですかと言いつ返すと、世の中には見ず知らずの人のほうが多いんだよと返される。そして、再び尋ねるのだ。「なにか理由でもあるの？」と。

「……もう必要ないんで」

「だから燃やすの？」

「いけませんか？」

「べつにいけなくはないけどさ」

彼女は少し考えるような仕草を見せたあと、

「燃やすところを見ていい？」

「……べつにかまいませんけど」

僕の返事を聞いた女性は、飛び上がりそうなほどに喜んだ。そんな姿を見ながら、僕は火の付いたマッチを投げつける。予想以上の速さで、火は僕と家族の思い出たちを飲み込んだ。

「すぐく燃えるんだね」

隣で女性がそう言ったが、僕はなににも返さなかった。なににも言わず、ただ火だけを見ていた。

「時に少年よ」

私は家がない。

「……は？」

なにを言われたのかわからなかった僕は、そんな間抜けな声で聞き返す。

「だから、家がないんだってば」

そして、

「できれば、面倒見てくれないかなあ」

そんなのが、アイカさんとの出会いだった。

今思い返すと、相当とんでもないな。初対面の人間に面倒を見ると言ったアイカさんもそうだが、そんな彼女を家に招いた僕はかなりとんでもない。頭おかしいんじゃないかと心配してみたりするけど、でもそれは間違いなく自分の事であって。

それでもあの時の僕の行動に適当な理由をつけるとするならば。

それはきっと、「寂しかった」という一言になるだろう。その一言で無理矢理にでも納得させるしかないのだ。

滑り台の最上部へと辿りつく。そこからは鮮やかに輝く街の明かりが見えて　なんてことはなかった。そりやそうだ。滑り台の高さなんてたかが知れている。

でも、そこにはアイカさんが居た。笑顔で僕を待っていた。それだけで充分だった。

「懐かしいなあ。覚えてる？ 初めて会った時のこと」

「……忘れるわけじゃないでしょう」

「というか、今の今までそれを思い出していたわけだが。」

「今日はなにも燃やさないの？」

「そんなしょっちゅう物を燃やしてるみたいな言い方しないでくださいよ」

あの時は特別だったんですよと言うと、アイカさんは不思議そうな顔でふうんと呟いた。そういえば、家族のことをアイカさんに話したこと、なかったっけ。

いい機会なのかもしれないなあ、なんて思った。

「……アイカさん」

「うん、なあに？」

「……いえ」

結局、僕はなにも言えなかった。家族のことも、あの日、火を放った理由も。

なんでもないんです。誤魔化すために発した僕の言葉にアイカさんは不審そうな顔になり、そんなことはないだろうなにか言いたいことがあつたんじゃないのかもしれないそうならはつきり言えよと詰め寄ってくる。どうもうやむやにして逃げることはできないような雰囲気だった。だけど、僕の口から家族のことを話すこともできないようであり、しかたなく僕は、

「アイカさん、両親の顔は覚えていますか？」

「ふえ？」

予想外の質問だったのだろう、アイカさんは可愛らしい　もしくは間の抜けた　声をあげた。なんで急に、と不思議そうにしていたけれど、まあいいから答えてくださいよと僕が促すと、彼女はどこか渋い顔で頭をポリポリと掻きながら、

「……覚えてる、と思う。たぶん」

「思う？ たぶん？」

「家を出たの、だいぶ前だから。だから、もう二人とも変わっちゃ

つてるかもしれないし、それに、」

あの頃の二人の顔も、ぼんやりしてきちゃってるんだよね。アイカさんは俯きながらそう告白した。

「……………会ったほうがいいですよ」

「……………今更無理だよ」

あまりいい別れ方ではなかった。憎しみあつて、嫌い合つて、そんな状況で出てきた。そんな私が、どんな顔をして帰ればいいというのだ。それが彼女の言い分だった。だけど、でも、

「いつか、会えなくなるんですよ？」

ご両親は健在なのかと尋ねると、二人とも健康なだけを取り柄だったから、たぶんまだ元気だと思ふという返事が返ってくる。それなら、やっぱり会ったほうがいいですよ。僕は先程の主張を繰り返した。

「……………どうかしたの？」

「なにがですか？」

「だって、なんだか妙にしつこいから」

「……………すいません」

ああ、やってしまった。僕は今、アイカさんに自分の思いを押し付けていた。過去のこととか、そういった僕の中にあつたものを、彼女に背負わせようとした。

最低じゃないですか。

「……………まあ、わかつてるけどさ」

このままじゃいけないってことぐらい、君に言われなくてもね。空を見上げてアイカさんが呟く。そんな彼女につられて僕も空に目をやると、そこでは無数の星たちが自分の存在を知らせるために輝いていた。

「だけどね、」

今会つても、きっとお互いに素直になれなくて、やっぱり嫌いあつたまま別れることになるんじゃないかって思ふんだ、とアイカさんは言う。じゃあ、いつになったら会えるんですかと尋ねると、そ

れはわからないなあという返事。

「ただ逃げてるだけなんじゃないですか？」

疑いの目と共に僕が尋ねると、

「そうかもしれない」

でも。

「その日は、きつと来る」

こんな私でも、それだけはわかるんだ。そんなことを話すアイカさんの声はとても綺麗で、陳腐な例えかもしれないけれど、まるで星のようだと僕は感じた。本当だよ。

「……まあ、信じちゃもらえないかもしれないけどさ」

僕の沈黙をどう捉えたのかはわからないけれど、とにかくアイカさんは、苦笑いを浮かべながらそう言った。僕は慌てて、そんなことはないですと告げる。

「信じますよ、今の言葉」

僕のその発言に、アイカさんはしばし驚いたような顔をしていたが、やがて笑顔と共に、

「ありがとう」

とても優しい声だった。だから僕も、つられて言う。

「ありがとうございます」

「なにが？」

なにかお礼を言われるようなことをしたんだろうかとアイカさんは不思議だったが、

「気にしないでください」

なんとなく言っておきたかったんです。僕がそう告げると、

「……変な子だね」

まあ知っていたけどさ、と言われてしまった。まったく一言多いんだよ。まあいいけどさ。

「……帰りますか」

「……だね」

僕とアイカさんは、二人して子供用滑り台を滑った。ほんの少し



の空中からの帰還。

「ここんとこる寒くなってきたよね、もうすぐ冬だね、とアイカさんがしみじみ言った。

「そうですね」

「寒いよね」

「はあ、まあ」

「じゃあ、はい」

そう言っただけで差し出されたのは、アイカさんの右手だった。けれどその中になにかが入っているとかがさういったことはないみたいで、はていつたという意味だろうかと思案していると、

「……君ってたまにどうしようもないほどム力つく奴だね」

「はっ？」

「手をつなごうって言ってんだよ女の子に恥をかかせるなよ！」

強い口調で放たれたアイカさんの言葉に、僕は数瞬身動きをすることを忘れてしまったのだが、

「ほれ」

もう一度、アイカさんが僕に向けて右手を差し出す。

「寒いんだよ、早く」

「は、い」

しっかりとその手を握んだ。寒いんだよ、なんて言っていたわりには、その手はとても暖かくて、なにやら訳の分からない安心感のようなものに包まれた、そんな気がした。

「じゃ、帰ろっか」

どこか満足気な顔のアイカさんが、そう言った。

断る理由はない。僕たちは、ボロアパートへ向けて歩き出す。

「あ、そうだアイカさん」

「一つ聞きたいことがあった。」

「なに？」

「ひよつとしたらなんですけど、  
照れてます？」

「なに言ってるんの君」

「いや、なんだかいつものアイカさんとは違うっていうか」

「気のせいだ変なこと考えてるんじゃない死ね」

それはちよっとひどいんじゃないの、と思ったりした。でも、まあ手が暖かったので、よしとしよう。

I want to date, the truth was shyness

いつにもまして、暖かかった。ちなみに気温の話ではない。そうではなくて、つまり、

「……暑い」

目覚めると、汗をびっしょりとかいていて、随分と気持ち悪かった。こんな起床は最悪だ。まったく、誰のせいだ。

僕は、まるで抱き枕に抱きついていてるかのように腕と足を絡みつけてきているアイカさんの顔を見た。両の瞼はしっかりと閉じられている。どうやら、彼女はまだ夢のなかにいるらしかった。全裸でもう一度言おう、全裸で。つまり僕は今、なにも身につけていないアイカさんに抱きつかれているわけだった。なんかもう、いろいろとやばい感触が伝わってきて朝から非常事態宣言発令中なわけなのだが。

「近いんですよまったく……」

一晩中抱きつかれていれば、そりゃ汗だくにもなるわ。もともと僕は暑がりだし。

枕元の目覚まし時計を勘だけで掴み、時刻を確認。午前五時四十五分。まだ起きるには早いような気もするけれど、しかし目がさめてしまったものはしょうがない。

布団から這い出そうと、まとわりつくアイカさんの体を引き剥がそうとしたのだが、しかし。

アイカさんは、おおよそ寝ている人間の物とは思えないような力で、がっしりと僕のことを捉えていた。つまり、彼女が起きるまでは僕の身に自由は訪れないらしかった。

「マジかよ……」

なんて言ったところでどうすることもできず。結局僕は、また目覚まし時計に目をやるのだった。

午前五時四十七分。

まあ、いいか。二度寝をするには危険な時間だけれど、布団の中でまどろんでいるくらいならば平気だろうさ。……汗はかくことになるだろうけれど。

しかし、だ。朝から汗びっしょりになっているというのに、しかしそれでも、不快な気分というのはまったくなかった。むしろ妙なことだと自分でもわかっていているけれど、なんというかこう、嬉しいような。

そんな気すら、していた。

目覚めたとき、すぐ隣に誰かがいる。それだけ。文字にすれば、たったの十六文字。だけど、それは僕にとって、自らの顔をほころばせるには充分なことらしかった。

やれやれ、随分と丸くなったもんだね、僕も。

まあ悪いことじゃあないんだだろうけど。

けれど、それでも。ある一つのこと、僕の中に影を落とす。

こんな日々は、いつまでも続かない。わかっている。きつとまたアイカさんは、適当な依代を見つけて、僕の前から姿を消す。そして、僕は

また、一人になる。

おいおい、なにを深く考える必要がある？

そんなのは、わかりきっていることじゃないか。というか、一人でいることが当たり前のはずなのだ。だから、アイカさんが僕の前から消えたり、また一人で適当に夕飯をとったりすることは、べつにどうということもない、ごくごく当たり前のことなのだ。呼吸をするのと同じくらい、当たり前のことなのだ。

「……わかってるけどさ」

アイカさんの髪に手を伸ばしてみた。とくに意味はない。なにも決まっている。ないはずだ。

とにかく僕は手を伸ばし、そして。

触れた。

まあ、どうということもないのだけれど。ただ、僕のそれよりも

幾分さらさらとした感じを受ける。

僕はそのまま、出来る限り優しく、手を動かした。思えば、女性の頭を撫でるなんて経験はこれが初めてかもしれない。いや、妹にしてやったことがあったような気もするな。だけでもあ、あいつは家族だから、あつてもカウントしなくていいだろう。

不意に、妹のことを思った。僕が昼寝していた頃、苦しんで苦しんで苦しみながら死んだ妹のことを思ったのだ。

果たして、僕はいわゆる「いい兄」だったのだろうか。たしかに仲はそれなりによかったけれど、喧嘩をしたことは一度や二度ではない。もっと優しくしてやればよかった。もっと声に耳を傾けてやればよかった。今更そんなことを思っても遅いなんてことはきっと小学生のガキですらわかることなのだろうが、しかし今の僕にはそれができなかった。

なんて、くだらないことを考えていたせいだろうか。

「……ん」

小さな声と共に、アイカさんが目を覚ました。

「おはようございます」

「……なんで撫でられてるの？ 私」

「いやまあ、なんといいいますか」

なんと言い訳しようかと考える僕に対して、アイカさんは続けた。  
「どうして、泣きそうな顔をしているの？」

「……え？」

アイカさんは自らの両手で僕の頬をはさむと、ぐいっと顔を近づけ、そして観察するような目で見てくる。そして、数刻の後、

「やっぱり、泣きそうな顔だ」

「……ああいや、僕も今起きたばかりでして」

だから、目に涙が溜まっているんですよ。自分でも苦しい言い訳だと思っただが、それ以外に思い浮かばなかったのだ。

アイカさんはそんな僕のことを、優しくそうな目で眺めながら、昨日も君はそんな顔をしていたねえ、と話しだした。

「余計なお世話かもしれないけれど」

泣けるときに泣いておいたほうがいいよ。そんなことを言うのだ  
った。

「じゃないと、私みたいになっちゃうよ」

「……どういう意味です？」

「なんでもない」

おいおい　そりやないぜ。だけどそんなことを言ったところで、  
アイカさんはなにも答えてはくれないのだろう。だから僕は、心  
中で思うだけに留めておいた。

「そんなことよりおなかすいたー」

子供みたいにアイカさんが言うので、僕は腰をあげて台所へ向か  
う。目玉焼きとトーストでいいかと問うと、

「できればご飯のほうが……」

「無理ですね。炊いてないから」

それを聞いたアイカさんは不満の声をあげたが、明日からはちや  
んとご飯を炊いておきますからと僕が言うのと、とりあえずはおとな  
しくなってくれた。やれやれ、まるで子供である。大人なのは体だ  
けだ。

体だけ、という部分で、先ほど全身で感じたアイカさんの感触を  
思い出し、なんとも言えない気分になる。

なんとなく気配を感じてちらりと背後を振り返ると、全裸のまま  
のアイカさんが、僕の肩越しに覗き込んでいた。

「な、なんですか」

声が変に裏返ってしまった。多分、妙なことを考えていたせいだ。

「いや、なんとなくさ」

言いながら、アイカさんが体を動かした。その拍子に、とても柔  
らかな感触が僕の背中当たる。これはつまり、そういうことなの  
だろう。

「あんまり近づかないでください!」

するとアイカさんは、なんで、と首をかしげる。

「駄目なの？」

「駄目ですよ！」

注目されると料理がしにくい、なんていう適当な理由を僕が述べると、ちえっわかったわかったなんてぶつぶつ言いながらも、アイカさんはどうにか離れてくれた。

「服を着ながら待つていてください」

「わかったわかった」

半熟で頼むよ。そんな注文をつけることをアイカさんは忘れない。まあいいけどさ。最初からそのつもりだ。

僕も半熟の方が好きだし、それに

こんな注文を受けるのは、今回が初めてってわけじゃないのだ。アイカさんは黄身が半熟の目玉焼きが好き。それほど頭がいいわけではないと自覚している僕でも、そんなことくらいはいいかげんに覚えるさ。

僕は目玉焼きにソースをかけるのだが、アイカさんは醤油派だ。だからなにして話。

薄い膜に覆われた黄身に箸を刺すと、黄色が溢れ出してくる。よし今朝の目玉焼きは大成功だなよくやったぞと自分を褒めてやりたい。

「そういえばさ」

今日、なにか予定はあるか。醤油差しに手を伸ばそうとしていたアイカさんにそう尋ねられた。

「今日ですか？」

はてなにかあっただろうかと考えてみたが、思い当たるものはなかった。自慢じゃないが、僕は友達が少ないので、突発的に遊びに誘われる、なんていう可能性はないに等しい。

「……ほんとに自慢じゃねえな」

「なにが？」

「いえ、なんでも」

こつちの話です、と誤魔化してから、特に予定はないですがとアイカさんに伝えた。すると彼女は、ふんふんなるほどそうかと数回頷いた後、

「じゃあさ」

デートしようか。

「……は？」

デート。突然現れたその単語の意味はもちろん知っているが、だからこそ僕は混乱した。愛し合う男女が、日時を決めて、各自の家以外の場所で会うこと。また、その約束。それがつまりデートの意味であり定義であるわけなのだが、ここで問題になってくるのは「愛しあう男女が」という部分である。愛しあう。これはつまりどういうことなのだろうか愛ってはようするに好きってことであると解釈していいのであるうかだけど好きってのも色々あるじゃないか例えば友人としてとかそういうつまりライクなのかラブなのか

「このあたりに来たの久しぶりだから、色々見て歩きたいんだよね」  
まるで、頭から冷水をぶっかけられたみたいだった。

アイカさんのその声で、それまでうんと熱くなっていた僕の内部が、しゅんしゅんと冷たくなっていくのが、よくわかった。

「え、え、それは、つまり、」

「いやー、昨日はほら、お腹が空いてて外に出るような気分じゃなかったからさ」

知らねえよ。

「ただ遊びたいだけじゃないですか……」

僕は自分を叱責してやりたくなった。まったく馬鹿たれが、アイカさんの言うことをいちいち真剣に受け止めていたらキリがない。そのことをいい加減に理解しろよ。そんなふうにならぶ、その一方で、なぜ自分がこんなにも憤っているのか、わからなかった。まったくおかしい話じゃないか、自分のことなのにわからないだなんてさ。

「ね、いいでしょ？」



「ああはいはい、いいんじゃないですかね」

なんとなく返した生返事だったのだが、それを聞いたアイカさんは嬉しそうに両手をぽんと合わせた。

「じゃあ決まりね」

「は？」

ちよつと待つてくれ、いつたいなにが決まったというのだろう。

「だから言っただじゃない」

今日は僕の学校が終わったなら、二人でデートをするのだ。彼女はそう言った。

「君だつて今、賛成してくれたでしょう？」

「……………ああなるほど」

そついうことね。理解理解。

今度から、ちゃんと話を聞いてから返事をしようと思った。

アイカさんに見送られて外へ出る。

「待ち合わせ、遅れちゃだめだよ」

まったく、まるで子供みたいだ。そんな嬉しそうな顔をするほどのことでもないだろうに。そうは思っただけけど、

「わかつてますよ」

そつちこそ遅れないでくださいねと言い返すと、そんなへまをするわけがないじゃないか、私を誰だと思っているのだとアイカさんは胸を張った。

「そりゃまあ、

頼もしいことで。

学校への道を歩きながら、僕はぼんやりと先程のことを思い出していた。自分を叱責してやりたくなった、その理由。あの時は冷静じゃなかったから、なぜ自分がそんなことを思ったのかわからなかったけれど、今ならわかる。

たぶん僕は、

「悔しかったんだろうな……」

デートをしよう、なんて言われて浮かれていた自分。だけどアイカさんはそんなことを考えていたわけではなくて、ただなんとなく、デートという単語を持ち出したただだった。それが僕には妙に悔しかったのだろう。

まったく、馬鹿だね僕は。わかつちやいたけどさ。

なんか楽しそうだな。そんな声をかけられたのだが、しかし僕は、それが自分に対してのものだとは思えなかった。

「え、誰が？」

「だから、コノウチが、だよ」

そうしてヤマダ君は僕の眼前に人差し指を突き出した。

「僕が？ 楽しそう？」

いったいどこが、と尋ねると、いやあどこがって言われると困るんだけど、なんかそんな気がしたんだよという非常に抽象的というか要領を得ないというか、そんな答えが返ってきた。

「べつになにもないよ」

笑いながらそう返したその時、僕の脳裏にアイカさんの顔が浮かび上がった。

嬉しくなんて、ない。

例えば、急に同居人が現れたいたとか、その同居人がとても可愛いだとか、その人と放課後に会う約束をしているだとか　そんなことがあったとしても、

「全ツ然、嬉しくない！」

「なに急に叫んでんの、お前」

気がつく僕は椅子から立ち上がっていた。

椅子に座ってから、僕のことを不審そうな目で見るヤマダ君に、いやいやべつになんでもないんだよと釈明してみたのだけれど、やっぱり彼は僕のことを不審そうな目で見ていたのだ。ちくしゅ、これも全てアイカさんのせいだ。おいおいそれはあんまりなん

じゃないだろうか、なんていう声が脳内から上がったかもしれない、とりあえず今のところはそういうことにしておいた。

脳内でアイカさんのことをボロクソに言っておきながら、しかし学校が終わると同時に寄り道もせず待ち合わせ場所に向かう僕は、ぶつちやけ相当どうかしていると思う。今から行っただって、約束よりも随分と早く着いてしまうのはわかりきっているのに、それでも僕は、普段よりも少し早いくらいの歩みで、繁華街の中心部へと向かうのだった。

住人の僕が言うのもなんだが、この街は田舎だ。確かに、小学校が廃校になったりだとか、バスが一日に三便だとか、隣の家まで歩いて十分だとか、そこまでのレベルではない。ドでかいマンションがそこら中に建っていて、コンビニも乱立していて、そんなわけだから真夜中でも明るくて治安もいい。でも、でも、なのだ。

なんとなく垢抜けないというか、都会を呼ぶのは些かはばかられる、そんな街。そんな街に、僕は住んでいる。

その街の中心部、市役所の隣に、時計塔というものが建っている。ロンドンのビックベンからヒントを得た、なんていうふうに観光案内の看板には書かれているが、実際はあれをまんま小さくしただけである。オリジナリティーのオの字もない。けれどそこそこ目立つこの場所は、待ち合わせ場所として有効利用されている。

僕は塔の時計を見上げた。午後四時三十分。随分と早く着いてしまった。たしか待ち合わせの時間は午後五時だったはずで、つまり、「三十分も待つんかい……」

自分が悪いとはいえ、僕は大分げんなりした。とは言っても、今からどこかへ行って時間をつぶすというのも面倒な気がする。基本的に面倒臭がりなんだ、僕は。

だから。だから僕は、好きな歌を口ずさんで待つことにした。ただし脳内で、だけ。

ピロウズの「この世の果てまで」から始まり、アシッドマン、スネオヘアーと続き、ナンバーガールの「鉄風、鋭くなって」を歌い終わった頃だった。

「お待たせ」

ほんと左肩を叩かれたのでそちらを向くと、黒い上着に黒いパンツという上下真っ黒な格好をして、笑みを浮かべたアイカさんが立っていた。

「約束、忘れてなかったんだね」

えらいぞ、なんて、まるで小さな子供に言うみたいにして、アイカさんは僕の頭を撫でる。やめてくださいよ。幾分強い口調で訴えて、その手を払う。

「なんだ、面白くない子だなあ」

そんなに怒らなくなっただけいいじゃないか。アイカさんは不満げだ。そんな様子を見て、僕は少し慌てる。

「あ、いや、べつに、」

怒ってるとか、そういうことではないのだ。頭を撫でられるくらい、どうってことはない。けれどそれには但し書きが付いて、つまり、「公衆の面前でなければ」ということだ。わざわざ言うまでもないことだと思うけれど、僕は人前で頭を撫でられて、それでも特に気にせずにいられるほど子供ではないのだ。じゃあ大人なのか、とか尋ねられてしまったら、きつと閉口する以外に方法は見つからないのだからうけれど。面倒な年頃なんだ。自分でもそう思うよ、まったく。

「そんなことよりも」

僕は話題を変えることにした。僕の頭のことなんかよりもよっぽど重要な事へ。

「この後はどうするんです？ 行きたいところとか、あるんですか？」

「あるある、ありすぎるほどあるよー」

とりあえずは服が欲しい、と彼女は言った。

「ほとんどの服、前のところに置いてきちゃったからさ」

「……ああ、そうですか」

前のところ。ここじゃないどこか。僕じゃない誰かの、名前も知らない男の、その場所。どうやらそこにはまだ、アイカさんの痕跡が残っているらしい。

不意に、燃やしてやりたくなった。どこの誰かわからない、その野郎の家にまだ残っているのであろうアイカさんの衣服を、一つ残らず燃やしてやりたくなった。消し炭になるまで。そして、

そいつの脳内からも、アイカさんに関する全てのことが、消えてしまえばいい。

その男はきつと、僕の知らないアイカさんの姿を知っているのであろう。その男は、アイカさんにどんな言葉を掛けたのだろう。わからない。アイカさんはその言葉に、どんな顔で返したのだろう。わからない。わからない。

わからないから、腹立たしい。

「付き合ってね」

突然耳に入ってきたその声で、僕は我に返る。

「な、なにが？」

「だあからー、買い物だよ、オ、カ、イ、モ、ノ」

ほらほら行くよ。そう言ってアイカさんは歩き出す。はいはいわかってますよ。僕も彼女の背中を追う。少し迷ったけれど、やっぱり横に並ぶことにした。べつに深い意味はないんだけどさ。ただ、このほうがその、なんというか、自然だろう？

「服を見るんじゃないんですか……？」

僕の問いに対してアイカさんは、確かに服も見るけれど、誰もそれだけだなんて言っていないじゃないのと反論した。

「いやまあ、いいんですけどね。アイカさんの買い物だし」

だから僕は外で待っていますね。そう言い残して店外へ向かおうとしたのだが、思い切り襟首を掴まれてしまいそれは出来なくなっ

てしまった。

「駄目だよ」

「なんでですか」

「アドバイスしてよ。光栄に思いなさい、私の身につけるものを選べるんだから」

べつに選びたくない、なんてうつかり言ってしまったものだから、襟首への力はさらに強くなった。その力というのがまた強烈で、そのうち首がぶしやりと握りつぶされてしまうのではないかという生命の危機を感じた僕は、

「わかったわかった！ わかりましたよ！」

どこにも行かないですから、その首を掴んでいる手を離してくださいと懇願した。

「わかればいいのよ」

非常に不気味な笑顔と共に、どうにか僕の首は自由となった。

「なにかよさそうなのがあったら教えてね」

「よさそうなのあったって……」

僕は店内をぐるりと見渡し、すぐに恥ずかしくなって俯くはめになった。

女の下着なんて、選んだことないっつーの。

そう、今僕のいる場所というのがつまり、女性向け下着店なわけだ。いやべつに、下着を買うとかそういうことを言いたいんじゃない。ただ、ただね、僕を連れてくる必要はないんじゃないかと、そう思うのだ。

「だめよ」

この機会に君の趣味を把握しておきたいもの、とアイカさんが言う。そんなもん把握されたくないわ。

「君の好きな下着をつけてあげる」

「……そんなんされても、べつに見る機会もないですし」

「部屋では毎日下着姿でいてあげようか？」

そんなことをアイカさんが言うもんだから、僕はついつい彼女の

下着姿を想像してしまう。

「風邪引きますよ」

……いや、いやいやいや。そうじゃないだろうよと自分につっこむ。そうではなくて、もつと他に言うべきことが　なんてことを言ってみても、そんなことはよくわかっていているのだった。何故って、そりゃあ自分のことですから。だけど、正直に告白すると、アイカさんの下着姿なんてものを想像してしまったものだから、頭の中が熱くなってしまったというか、うまく働かなくなっているのだ。だから僕が少々的是はずれなことを言ってしまったのは仕方のないことなのだ。そうなのだ。そうに決まっているのだ。

そんな僕をよそに、アイカさんは下着を物色している。もうほんと帰っていいかなあ僕。

「ね、これなんかどう」

振り返った彼女は、ピンク色の下着上下を手にしていた。

「どうって言われても……」

女性物の下着を眺めるのは随分と恥ずかしいものがあつたが、しかし問われたからには一応答えるべきだろうと考え、僕はそのピンク色の下着を眺めた。

上にも下にも、いったいそれにはなんの意味があるんでしょうか、無駄なんじゃないですか、仕分けされたいんですかと制作者に尋ねたくなるほどのひらひらとした布が飾り付けられている。うーん、なんというか、

「派手……なんじゃないでしょうか」

なんだって僕は下着の感想を述べたりしているんだろっねと不思議に思ったりした。アイカさんと出会っていないければ、こんな機会もなかっただろう。それがいいことなのかどうかはわからないけれど。少なくとも、今の時点では。

「なるほどね、派手か。なるほどそうか」

ふんふんと頷きながら、アイカさんは再び下着を手にとって僕に見せた。

「これはどう」

「もういいですよ、いちいち僕に聞かなくても」

自分が良いと思うものを買えばいいじゃないですか。そう言ってみただが、今日は君に選んでもらうって決めていたんだ、なんて返されてしまったものだから、もうそれ以上なにも言えなくなってしまう。ちくしょう。なんかわかんないけどちょっと嬉しいじゃないか。

アイカさんが手にした下着に目をやる。たしかに先程のような無意味な装飾はないけれど、

「色がねえ……」

「色？」

僕は頷いた。今回の下着も先ほどと同じような淡いピンク色だった。

「ピンクは嫌い？」

嫌いというわけではない。ただ、

「アイカさんには、合わないような気がして……」

「ふうん」

やっぱり頷きながら、アイカさんは下着を元の場所に戻した。そして、

「じゃあ、私に似合うのってどんなの？」

笑顔で問われた。くそ、そういうことか。

「わかった、わかりました。選びますよ」

「初めっからそうしておけばいいのに」

この場合、まんまとハメられた、と表現していいのだろうか。少なくともアイカさんの思惑通りにはなったみたいである。

とはいえ。引き受けてしまったからには、アイカさんに似合う下着を選ばねばならない。

「似合う、ねえ」

とりあえず、無意味な装飾はいらない。なんとなくアイカさんにはそうついた物を身につけてほしくない。となると、次は色だが…



…。

アイカさんといえば黒、というイメージが、確固として僕の中に存在している。アイカさんは黒、またはそれに近い濃い色の物を身につける率が高い。今だって、彼女は上下とも黒でまとめている。……下着まではわからないけどさ。だけどもあ、イメージ通りに決めるのであれば、僕が今選ぶべき下着の色は黒、ということになるのであろう。

しかし、だ。

「違うんだよなあ……」

アイカさんは確かに黒い物をよく身につける。だけど、それよりも。

「これ、なんてどうですかね」

僕は選んだものをアイカさんに手渡す。

「……白？」

意外だ、というふうな表情をアイカさんは浮かべた。白い、なんの飾り気もない下着の上下。

「似合うと、思っんです」

多分ですけど。付け足したその言葉は、果たして彼女に届いていただろうか。

「ふうん……」

アイカさんはその下着をほんの数秒見た後、

「よし、これにしよう」

「マジですか」

思わず声が出てしまった。

「いけない？」

「いや、いけないってことはないですけど」

ただもう少しく考えたほうが、という僕の発言は、不意に唇に当てられたアイカさんの人差し指によって止められた。

「いいの」

真剣に選んでくれたんでしょう？ とても優しい声で問われた僕

は、馬鹿みたいに首を上下に何度も振った。だってしょうがないじゃないか。僕を見るアイカさんの目は、まるでその奥底に吸い込まれてしまいそうな、すべてを包み込むような、そんな　とてもとても優しい目だったのだから。そんなもの前で、いったいなにをしるというのだろう。きつと誰もが、僕と同じような行動しかできないだろうさ。賭けたっていいね。

「君が選んでくれたんだもの。いいに決まっているじゃない」

結局アイカさんは、僕の選んだものとそれに近い系統の下着を数点購入した。

会計の際、店員のお姉さんが、仲がよろしいんですねなんて言っていたけれど、それはどういう意味だったのだろう、なんて考えながら、僕はアイカさんの背中を追って店を出た。

「さてと」

立ち止まり体をひるがえたかと思うと、アイカさんは僕について今しがた購入したばかりの下着の入った紙袋を突きつけた。

「な、なんですか」

「なんですかじゃなくてさ」

持って。ごくごく当たり前のことのようにアイカさんは言う。その瞬間、僕の脳内で、突然ぴんと張った一本の線が出来上がるのがわかった。ああなるほど。そうかそうか。

「最初っから荷物持ちさせるつもりだったんですね……」

「なんのことかなー」

白々しいにもほどがあるだろゴラァ！　なんて言葉をもう少しで吐き出しそうだった。だけど、ただだ。

落ちてちよつと考えれば、わかりそうなものだったのだ。たしかにアイカさんは朝の時点では買い物をすることを告げてはいなかったけれど、それでもその可能性は充分考えられたはずなのだ。だから、悪いのはアイカさんではなく、レブリミット七十くらの非常に回転が悪い頭を持ってしまった僕なのだ。なんていう

ことを脳内でくり返したけれどそれは本意ではなくそうしないと不満を口にしてしまいそうだったからである。

「で、次はどこへ行くんです？」

どうにか落ち着きを取り戻してから、僕は尋ねた。

「次は服！」

返答を聞いた僕は思わず嘆息した。どうやら、僕の持つ荷物はさらに増えそうだ。

「たまに不思議に思うんですけど」

よく熱せられた網を前に、僕はそう切り出した。なにが、とトングを使い肉を並べていたアイカさんが首を傾げる。

「アイカさんのことです」

「私？」

僕は黙って頷き、それから続けた。

「服をどっさり買ったかと思えば、」

隣の席に置かれた紙袋達を見る。それは全てアイカさんが本日購入したもので、合計金額がいったいいくらだったのか僕は知らないけれど、しかし決して安くはないであろうことくらいはわかるわけで、具体的な金額を聞こうとは思わなかった。たしかに気にはなるけど、なんというかこう、ちょっと怖いから。

「今度はこんな高そうな店で夕食だなんて」

今僕たちが来ているのは、高級なことで全国的に知られる焼肉屋だった。当然のことながら、僕は初めて訪れる。ただアイカさんの方はどうやら初めてではないらしい。ここには来たことはないけど、と先ほど口にしていたので、きっと他の地域の店には行ったことがあるのだろう。

「べつにいいじゃない」

おいしいものは好きでしょう、とアイカさんに聞かれたので、もちろんだと首を縦に振った。でも、でもですね。

「僕みたいなガキがこんなことを心配するなんて馬鹿げてるってわ

かつてるんですけど、でも、あの、

大丈夫なんですか？ アイカさんは僕のその言葉の意味を理解することができなかったみたいで、なにが、と尋ね返してきた。

「いや、あの……お金が」

「…………ふっ」

それまで不思議そうな顔で僕を見ていたアイカさんが、今度は突然笑い出した。その声はそれほど狭くはない店内中に響きそうな大ききさで、少し恥ずかしくなって僕はアイカさんを制した。

「ちょ、アイカさん、落ち着いて」

「ん、ああ、いや、ごめんね。ごめ……ふっ、くく……」

けれどアイカさんはなかなか笑い声を止めない。まあだいぶ小さくなつたからいいけどさ。

「なにがそんなにおかしいんですか……」

「いや、なんていうか、優しいっていうか、気を使いすぎっていうか、ね」

可愛い可愛い。そう言いながらアイカさんは、テーブルの反対側の僕の頭に手を伸ばすのだった。やめてくださいよ。僕の声には耳を貸さないアイカさんだったが、

「あつっ！」

突然、アイカさんの体がビクリと震え、それまで僕の頭を撫でていた手が引つ込められた。どうやら、肉の脂が跳ねたらしい。

「自業自得っすよ」

「なによ、そもそも君が可愛いことを言うからいけないんじゃない」「はあ？」

なんだそれは。どういう理屈だ。その怒りは明らかに理不尽というか、少なくとも正しいものではないだろう。そもそも、

「僕は可愛いことなんて言ってますんよ」

けれどアイカさんは、

「言つたのよ」

僕は首を傾げるしかない。

「だいたいね、私がないを買おうが、なにを食べようが、そんなもの君が気にする必要はないのよ。わかる？」

「まあわかりますけど」

ただなんというか、こんなことを言うのは恥ずかしいのだけれど、

「……心配だったんですよ」

ああ、言ってしまった。なんだろうねこの妙な恥ずかしさは。

「え、なに？」

しかし僕の呟きは、網の上の肉をひっくり返すのに夢中だったアイカさんには届いていなかったみたいで、

「……なんでもないですよ」

僕はだいぶ安心した。

すいませーん、とアイカさんは店員を呼ぶ。ボタンがあるんだからそれを使えよ。

「ええつとね、ハラミとカルビと、あとユツケ。全部五人前ずつ追加で。あ、それからご飯大盛り」

「なんぼ食うんですか……」

会計の時には店の外に出ていよう、と思った。金額を見るのが怖い。

「うつ、気持ち悪い。ちょっと食べ過ぎたね、うん。お姉さんちょっと調子に乗っちゃった」

「自分なりに反省しているところ申し訳ないのですが、多分アイカさんが今気持ちの悪い原因は」

たぶん酒の飲み過ぎなんじゃないかなあ。っていうか間違いないだろ。先程までいた焼肉屋で彼女がビール（大ジョッキ）を何杯その体に収めたのか、僕は正確な数字までは覚えていない。しかし、とりあえず異常な量だったということだけは間違いない。その様子を見ていたこっちまでがちょっと酔っ払ったような気になってしまったんだもの。酒なんて飲んだことないけどさ。

「……本当なんだぜ」

「なあにを言ってるんだおみゃー」

ぺしん、と隣を歩くアイカさんに頭を叩かれた。おみゃーってなんだおみゃーって。どこの人だ。

「大丈夫なんですか？」

なぜ僕がそんなことを尋ねたのかというと、アイカさんの歩調がいわゆる千鳥足というやつをまさに体現していて、今にも倒れてそのまま路上でボタンキューしてしまいそうだったからである。

「だいじょーぶだいじょーぶ。ダイジョーブ博士だよー」

「それは全然大丈夫じゃないですから」

とにかく、早く家へ帰らなければならなかった。早く帰って、布団を敷いてアイカさんを寝かせて、ああでもアイカさん、ちゃんと着替えられるかなまあ今日くらいはいいかでも服がしわくちゃに

「やだっ！」

鋭い声と共に、アイカさんは突然僕の服を掴んで立ち止まった。あまりにも突然のことだったので、なにがですか、いったいなにが嫌なんですかと尋ねる。すると彼女は、

「まだ帰りたくない」

だってだって、とアイカさんは自らの腕に装着した時計を見せてくる。

「だってまだ七時半なんだよ！？」

「そんな時間にべるべろに酔ってるのはどこの誰ですか」

「まだかーえーりーたーくーなーい！」

今度はまるで子供みたいに、全身を揺らしながら抗議の声をあげた。当然のことながら、道行く人々の視線がアイカさんと、彼女に服を掴まれている僕に注がれる。やめろそんな目で僕を見るな、つてどつかで聞いたことのあるセリフだな。いったいなんだったつけ、いやいやそんなことは今はどうでもいいのであって、

「駄目ですよ。今日はもう帰りましょう」

通行人からの突き刺さるような視線に耐えながら、僕はどうにか

アイカさんを説得しようと試みたのだけれど、しかし彼女は受け入れられるどころか、そんなに早く帰りたいんなら君だけ先に帰ればいいじゃないか、私はもつと遊んでいくから、気にしないで帰宅しなさいなんてことを言い出す有様で、こりゃあどうやってもこのまま帰宅させるのは不可能だろうなと悟った。

「わかったわかった、わかりました」

放って置けるわけもないしな。付き合ってやるさ。

「どこか行きたいところとかあるんですか」

僕のその問いに、アイカさんは現在位置の目の前に建つビルを指さした。一体どういうことだろう。思いながら、僕はその指の先に目をやる。

そこには、この建物の七階にあるというカラオケ店の看板があった。

ぶっちゃけた話、僕はあまりカラオケの経験がない。興味は一応あるのだけれど、一緒に行く相手はおらず、かといって一人で歌うのはどうも寂しいような気がして。だから生まれてこの方、カラオケ店に入ったのは片手で数えられる程度しかない。

最後に訪れたのは そうだ。

あれはまだ、「家族」がいたころ。ここから遠く離れた街で。

不意に、妹のことを思い出した。彼女は歌が上手だった。そのことは覚えていて。けれど

それがどんな声だったのか、僕の記憶はかなり曖昧になっている。思い出そうと思えば脳内に彼女の声を再生するのは可能だけれど、しかしそれが本当に僕の妹のものなのか、自信がない。そのことがなぜか妙に怖くて、だから僕は必死に妹の声を思い出そうとした。けれど結局脳内に流れる妹の歌は曖昧なエコーがかかったままで、だから僕は、その歌の再生を止めた。きつと近いうちに、僕は妹の声を忘れてしまうだろう。そんなことだけはしっかりとわかった。

狭いエレベーターを降りると、目の前にはカラオケ店のカウンタ―があつたが、しかしその中に店員らしき人の姿は見当たらなかった。

僕の前にいたアイカさんが、カウンターに設置されたベルを鳴らす。チンチンという軽い音がフロアに響き、そして完全に消えた頃になってようやく、店名の入った紺色のエプロンを着用した店員が出てきたのだが、

「あ……」

思わず声をあげてしまった。僕の目はその店員に釘付けになる。そんな僕の様子に気づいたのか、その店員も僕の方を見て、

「あ」



同じような声をあげた。いや、それだけではない。

「コノウチじゃん」

その店員は僕の名を口にした。だからお返しに、なんてわけじゃあないけれど、とにかく僕も、その店員の名前を呼ぶ。

「ヤマダくん……」

まったく、どんな偶然だよ。

「さっきの子、知り合い？」

指定された部屋に入り、一段落してから歌本を手にとったアイカさんは、思い出したように僕に尋ねた。

「ええ、まあ。同じクラスで……」

友人だ、とは言わなかった。いや、言えなかったと表現したほうが正しいのかもしれない。僕はヤマダくんのことを好意的に思っているけれど、しかし向こうはどう思っているのかわからない、という我ながら恥ずかしくなるような臆病な考えが頭の中をちらついたからだ。やれやれ、いったい僕はいつまでこんな臆病な性格で生きていくのだろう。自分の事なのにそんなことを思った。

「ふうん」

アイカさんはすでに先程の質問に対する興味を失ったらしく自分から尋ねてきたにも関わらず、である、慣れた手つきでリモコンを操作し、それを置くと次はマイクを手にした。

「歌うんですか」

「そりゃーそうよ」

先程よりはまだマシになったけれど、しかし相変わらずふらふらとしながらアイカさんは立ち上がり、そして言った。

「カラオケで歌わないでどうすんのよ」

もつともである。カラオケで歌わないってのはつまり、代打で登場したのに一度もバットを振らずに三振してベンチに戻るようなものである。ちよつと違うような気がしなくてもないけれど、きつとそうなのである。

「君も、今のうちに歌う曲を決めときな」

へらへらと笑った後、アイカさんはテレビ画面に向き合い、そして間もなく曲が始まった。

実際、アイカさんは歌うのがなかなか上手いみたいだった。上手ですね。そう褒めると彼女は少し照れたように笑い、今日は酒が入っているから調子が良いのだと教えてくれた。どうやら、素面の時は気分が乗らないらしい。そんなもんならうか、まだ子供の僕にはわからない。成人して酒を呑むようになれば理解できるのだろうか。その答えが出るのは、まだ随分と先のことだった。

ほら。そう言いながらアイカさんは、僕に歌本とリモコンを押し付け、そして続けた。

「君もなんか歌いなさい」

「えー」

「えーじゃない」

いや、だけど人前で歌った経験なんてないものだから、緊張するというかなんというか、なんてことをぶつぶつと言ってみたのだけれど、

「初めはみんなそんなもんよ」

それに、と一旦言葉を区切ってから、

「私は君の歌を聞きたい」

僕の目を見てアイカさんが言った。どうにかして歌うことを回避しようとしていた僕だけれど、その瞬間に諦めた。

アイカさんの目は、いつになく真剣で、そんな目で見られてしまつては、もうこちらとしてはどうしようもないのだった。ロックオンされて打ち出されたミサイルからなんとか回避しようとして動いてみたとして、結局、命中してしまつてはどうしようもない。諦めて事実を受け入れるしかないのである。今回の僕の場合は、つまりその事実というのが、マイクを握って歌うということだったわけだ。簡単ですね。そうだろう？

歌本をめくり、歌えそうな曲を見つけ、その番号をリモコンに打ち込んで転送。そんな一連の動作を行ないながら、今更ながら僕は自分が今カラオケ店を訪れているのだという事実に、やっと実感が湧いたというか、妙な感動のようなものを覚えた。

「……あんまり期待しないでくださいよ？」

きつと下手くそだから、と付け加えてから、僕はマイクを手にソファから立ち上がった。

数年前に解散したロックバンド。今もまだ彼らのことを覚えている人なんてのは稀有だろうし、そもそも解散する以前も知名度なんてものはほとんどなかった彼ら。流行りのアイドルが出した馬鹿みたいな歌や、ロックを気取っているが実際はただギターをかき鳴らしているだけの薄っぺらいグループに押しつぶされて、ランキング上位へ一度も顔を出すことなく消えてしまった彼ら。そんな彼らの歌を、僕は歌った。

歌っている間は、妙な高揚感が全身を支配していた。普段、大声を出す機会なんてほとんどなかったから、だからマイクを握って好きな歌を全力で叫ぶというのは、ずいぶんと気持ちのいいものだった。

そんなふうな、ふわふわと宙に浮くような気分に包まれたまま曲は終わったのだが、それまでテレビ画面へ向けていた視線をアイカさんへ移すと、彼女は驚いたように僕のことを見ていた。

「あの……なんかすいません」

「なんで謝るのさ」

「いや、なんか」

上手くなかったでしょう。僕はそう口にした。こちらとしては随分と心地良かったけれど、しかし聞かされたアイカさんにしてみれば不快だったのではないか、なんてことを思ったのだ。歌えと言ったのはアイカさんだけれど、でもやっぱり断るべきだったんじゃないか、とかそういうことを思って思って思っ

そんなことないよ、とアイカさんが言った。

「いい歌じゃない」

「ほ……」

本当にそう思いますか。僕の問いに彼女は、嘘なんかついてどうするのさと笑う。その笑顔で、僕はだいぶ救われた。

「君の声もよかったし」

「お世辞はいいですって。慣れてないでしょう？」

嘘じゃない、とアイカさんは怒ったみたいに声を荒らげたが、もう僕はなんだかすべてがどうでもよくなっていた。アイカさんが怒ってもべつにいいや、だって、僕が好きな歌のことを、彼女も好きだと言ってくれたのだから。ほんの些細なことなのだけれど、しかしそのことはどうしようもなく嬉しくて、意図せず笑顔になっていくのが自分でもわかった。

「ちよつと、なに笑ってるの」

まだ少し怒気をはらんだ声でアイカさんが言う。なんでもないんです、と僕は返した。ただ、

「ちよつと嬉しくて」

「な」

なにが、というアイカさんの声は、突如として響いたノックの音で遮られ、それから間髪入れずに部屋の扉が開かれた。

「失礼します」

そんな声と共に入ってきたのは、店名の印刷されたエプロンを身につけ、右腕にトレイを器用に載せたヤマダくんだった。僕が彼の存在に気づいたのとはほぼ同時に彼もそのことに気づき、なぜかニヤリと笑った。

「チーズとクラッカーの盛り合わせと、生ビールです」

彼は口にした品をテーブルの上に置き、それから、と続ける。

「カップルの方にはフライドポテトを一皿サービスさせてただいております」

どうぞ、と言いながら、ヤマダくんはテーブルの上に皿を置いた。

そして

僕を見て、またニヤリと笑う。

「ま」

待てヤマダくん。君はなにか誤解しているぞべつに僕とアイカさんはそういう特別な関係ではなくていやたしかに普通の関係ではないのだけれどでもでもあれだよそのなんていうかカップルとかそういうんではなくってだねっていうか僕とアイカさんってそう見えるのかいそうなのかい。そんなことを、言おうと思ったのだ。けれどそんな僕の声は、

「あら、どうもありがとうございますー」

お辞儀なんかをしてヤマダくんに礼を述べるアイカさんによって遮られてしまった。くそ、チャンスを逃してしまったよ。

「いえいえー。サービスですからー」

笑みを浮かべたまま、どうぞごゆっくり、なんて言い残してヤマダくんは部屋を出て行った。

「いい子ね、君の友達」

もうすでにクラッカーに手を伸ばしているアイカさんが、呑気そうにそう言った。

「最悪だ……」

明日は学校を休もう、と思った。きつと登校すればヤマダくんに色々と聞かれるだろう。もしそうなったとして、僕はなんと答えればいいのか。そんなことを考えるのは、高次方程式の問題を解くよりも面倒な気がした。

「なにをそんなに落ち込んでるの？」

「……なんでもないです」

きつと言ったところでアイカさんにはわからないだろう。

「ふうん……」

アイカさんはそのままクラッカーをポリポリとかじっていたのだが、不意に、

「そうだ！」

「なんですかもう！ いきなり大声で叫ばないでください！」

けれど目の前の女性はそんな僕の声には答えず、さっきのことだけど、と一方的に話した。

「さっきのあれはお世辞なんかじゃないよ。だいたい私、お世辞言えないし。ほんとのことしか言わないの。わかる？」

どうやらアイカさんは、先程の僕の歌について言っているみたいだった。僕としてはその話題はもう終わったものだと思っていたのだが、アイカさんの中ではまだであつたらしい。

「ほんとに私は、さっきの曲はよかったって思っているし、それ以上君の声を好きになつた」

もつとはやくに連れてくればよかった、とも言つた。

「……そりゃ、ども」

褒められているのだからもつと嬉しそうにすればいい。自分でもそう思うけれど、しかし思つたことを全て実行に移せるかといえればそれはとても難しいことで。

予想もしていなかつたお褒めの言葉によって、背中がなんだか妙にむず痒かつた。ああわかつている。この感覚はわかつている。まだ大した時間を生きてはいないけれど、しかし自分のことくらいはわかるようになってきた。

要するに、僕は照れているのだ。アイカさんに褒められて、なんだか誇らしいような気分にもなつたけれど、それと同時に、とても恥ずかしくなつたのだ。そういうことなのだ。

「ねえ」

グラスにわずかに残っていたビールを飲み干してからアイカさんは言つた。

「また来ようね、カラオケ」

また来よう。何気ない一言。おそらくアイカさんもなんの気なしに漏らしたのであろうその一言は、しかし何故だか嫌らしいほどに僕のことを刺激した。

世間一般で言われる「大人」であれば、こういう時もうまく自分

をコントロールするのであろう。つまり、「何故だかわからないけれど腹が立っている」時なんかも。

「だけど僕はまだ子供だった。だから言いたいことを言っているのだ。だから僕は口を開いた。」

「簡単ですね。」

「ねえ、アイカさん」

「ん、なあに？」

僕に向けられる、優しい瞳。嬉しい、かもしれない。僕を見ていてくれているのが、嬉しい、のかもしれない。くだらない曖昧な語尾。そうすることによって僕は少しでもダメージを減らそうとしている。裏切られた時のために。これは馬鹿げた行為なのだろうか？明確な答えは僕には出せない。ただ一つわかっているのは、彼女の瞳はいつまでも僕を見ていてはくれないということだ。だって、なぜなら、今までがそうだったから。

「また、つていつですか？」

「……え？」

一瞬。本当に一瞬、アイカさんの表情がこわばったように見えた。その数瞬後には、それまでと同じような笑顔に戻っていたのでひよつとしたら見間違いだったのかもしれないと思ったけれど、それは違うと僕は気づいた。

「たった たった一箇所。」

「アイカさんの目。そこだけが、笑っていなかったから。」

「また、つてのは、まただよ。なんていうか上手く説明できないけど」

「つていうか、そんなことを聞くなよ小学生かよ、なんてアイカさんはおどけたけれど、」

「また、一緒に来てくれるんですか？」

怖かった。自分の声が、どうしようもなく怖かったその時の僕の声は、今までの人生の中で聞いたこともないような、まるで地面の底から響いているような、そんな声だったのだ。

「……それは、どういう意味かな」

アイカさんは、必死に笑おうとしているみたいだった。けどそれはうまくいかず、ただ口角をひくつかせるだけという結果となった。

「……なんでもないんです。忘れてください」

激しい自己嫌悪の気持ちが僕を襲っていた。馬鹿か僕は。なんて質問をしているんだ。

いたずらにアイカさんを傷つけた。その事実は僕の背中にずしずしと覆いかぶさってきて、まるで僕のことを押し潰してしまおうとしているかのような感覚。けど僕は押しつぶされたりはしない。臓物をぶちまけたりはしない。まだ呼吸を続けている。ならばやるべきことは一つしかない。

「……すいませんでした」

会計を担当してくれたのは、僕よりも二、三歳上であろうと思われる女性で、ヤマダさんの姿を発見することはできなかった。他の仕事をしているか、ひよっとしたらもう帰宅したのかもしれない。いやべつに、会えなかったからといって残念であるとかそういったことは思わないけれど。

店を出て自宅へと向かう僕とアイカさんの間には、嫌になるほど重苦しい空気が漂っていた。いや、ひよっとしたらそう思っているのは僕だけなのかもしれないけれど、でも。

「あ、あの、アイカさん」

なにか言わなくちゃいけない。具体的な内容は思い浮かばなかったけれど、とにかく僕は数歩先を歩いていったアイカさんを呼び止めた。

なあに、なんてこちらが拍子抜けするほど柔らかい声と共に、彼女が振り向く。その表情は悲しそうな、憂いているように見えたが、実際にはただ単に眠そうなのかもしれない。まあどっちだっていいんだけど。



「さっきのことなんですけど」

気にしないでください、と言った。今日はなんだか妙に疲れていて、ああそうだと体育の授業のせいだ、聞いてくださいよ校庭を十週もさせられたんです十週ですよ十週。僕そこまで足速いほうじゃないのにまったくもう。まあとにかくそんなことがあって、だからなんだか頭がぼーっとして、だから変なことを言ってしまった。そんな言葉が勝手に僕の口からずらずらと出て行く。だけどその言語の全てが言い訳であり、つまり言い逃れのためのものであるというのを僕は嫌になるほど理解している。もう嫌だ。どこまでも卑怯な僕は必死に言い訳をしてアイカさんに嫌われまいとしている。最低だ。最低の最低だ。ゴミ以下だ。死ぬべきだ。是非是非今すぐに死ぬべきだ！ けどどこまでも卑怯な僕はそんなことをしないわかっていた。

「だから、あの、ごめんなさい」

その一言だけは、本心から出たものだった。それだけで許してもらおうだなんて思わないけれど、とにかく僕は、アイカさんに謝罪しなければならなかった。アイカさんの知らないことまで、謝らなければならなかった。

「いいよ、べつに」

なにも怒っちゃいない。アイカさんはそう言いながら空を見上げる。僕もそれにつられてみるとそこには、満天の、と頭に付けるほどではないけれど、しかしそれなりの数の星の光が、ぼつりぼつりと灯っていた。

「綺麗よね」

僕が視線を戻してから、アイカさんは上空を見ていた。白い首が眼に入る。綺麗だ、と僕は思い、それからすぐに、いままで何人の男がこの首に吸い付いたのだろうと考えた。どこのだれかもわからない、いったいどんな容姿かもわからない、そんな男達の中に、どうして僕はいないのだろう。

アイカさんは、男性に依存していなければ生きていけない人だ。

誰か適当な男を見つけ、その男の元へと転がり込む。そしてその男に依存して依存して依存して 最後には、僕の家に戻ってくる。僕は依存の対象外なのだろう。男を見つける間のつなぎ。そんなもんだ。

そんな立場を、僕は一体どう思っているのだろう。簡単だ。面白くはない。

だけど。ただとだけとだけ。それを伝える勇気が、僕にはなかった。

不意に、僕の右手を温もりが包んだ。

アイカさんだった。彼女の左手が、僕の手を包んでいた。

「帰ろ？」

「……はい」

歩き出すまさにその時。僕はほんの少しだけ繋がれた手に力を込めてみた。それがどんな意味を持っていて、そしてアイカさんに伝わっていたのかどうかは まだ、わからないのだけれど。

ああ、まったく。悔しいことに、僕はどうしようもなくアイカさんのことが

翌日、やっぱりヤマダくんは僕に、おいおい昨日の綺麗なお姉さんは誰なんだよなんて詰め寄ってきた。あの人は君の想像しているようなそんな関係じゃないよ。僕のその答えに彼は、嘘をつけないもないわけがないだろう正直に吐けそうすれば悪いようにはしないなんて言ってきたけれど、しかしそれは本当のことなのでどうしようもないのだった。

ああ、本当に休んでしまえばよかった。

The rip appears really suddenly .

みんな、どこか浮き足立っていた。

街を歩けばそこかしこに綺麗なイルミネーションが並び、その下でカップルがなにやら囁き合っている。

そういえば、校内でも堂々といちゃつく奴等が増えたような気がする。たしかに前々から見ているこちらが恥ずかしくなるほどつつき合っているのがいなかったわけではないけれど、しかしここ数週間はその人数が異常とも言えるほどに増えていた。え、なに、お前ら付き合ってたの、なんていう驚きを提供してくれる親切なまたは目の毒な 人々もいて、まったく暇しないなあこんちくしよう。

「あー、面白くねえなあ」

イチャイチャしてる奴等、全員死なねえかなあ、死なねえんなら殺しちゃおうかなあ、なんて物騒なことをヤマダくんが呟いたので、僕は少しぞっとした。

「だってよ、コノウチだって面白く無いだろ？」

「まあ、確かにね」

僕達独り身の人間にとって、そういったいわゆるピンク色の青春を見せつけられるというのは少なからず腹の立つことではあるのだけれど、しかし、

「でも、しょうがないでしょ」

僕は教室の壁にかけられたカレンダーを指さした。

「……まあな」

カレンダーに印刷された文字を確認したヤマダくんは、諦めたようにため息をついた。

早いよなあ、一年つてさ。彼の呟きに、僕は頷きで返す。

期末試験はとくに終わり、学校中がすでに冬休みモードに突入していた。実際、明日の終業式を終えればそれが現実のものとなる

のだけれど。

もうすぐ、一年が終わろうとしている。

自宅への帰り道を辿りながら、だいたいよお、というヤマダくんの声に、僕は耳を傾ける。

「キリスト教徒でもないのに、クリスマスクリスマスって騒ぐのはどうなんだろうな」

あつたまわるいぜほんとによ、なんていう彼の言葉の裏には、何故俺には聖夜と一緒に過ごしてくれる女性がいなんだおかしいじやねえか畜生、という叫びが隠れているように思えた。そしてそれはおそらく間違っていないのだろう。

一年に一回くらいはいいんじゃないの、と僕が言ってみたら、  
「……お前はいいよな」

挑戦的な目付きでヤマダくんは僕を見た。はて、なにか怒らせるようなことを言ったりやったりしただろうか。というか、

「いいよな、ってなんだよ」

「とぼけんな！ この裏切り者が！」

突然ヤマダくんは怒りだした。裏切り者、なんて言われても、こちらには裏切った覚えなんて耳かきの先っぽ程もないので、まったく首を傾げるしかない。

「お前はあれだろう、この間一緒にカラオケに来てた可愛いお姉さんと一緒にクリスマスを過ごすんだろう？ 聖夜を性夜にしちまうんだろう！ まったくもう、聖闘士星矢！」

「うわあ……」

思わずそんな声をあげてしまった。なんだろう、暴走して訳の分からなことを口走っている人を目の当たりにした時のこの気持ちはどう表現したらいいのか、今の僕にはわからない。ただ一つ、「可哀想」という思いだけははっきりと理解できたけれど。

「ヤマダくん、落ち着いて。ここは往來の真ん中だよ。君の忌嫌うカップル達が気味の悪そうな顔でヤマダくんのことを見ているよ」

「腐った卵を投げてやる！」

「黄身が悪いんじゃない……」

ヤマダくんをなんとか落ち着かせようと頑張ってみたのだけれど、しかし結果として彼はさらにヒートアップして、くだらない洒落まです飛び出してしまい、これはもう、僕の思惑と試みは失敗に終わったと言ってしまうていいみたいだった。

「どうでもいいけど、ヤマダくんはまだ僕とアイカさんの仲を勘違いしているみたいだね……」

前も言っただけ、僕とアイカさんはただの知り合いで、彼女はただ僕の家に移り込んでいただけで、そこに特別な関係とか感情とかはないんだよ。以前に話したことほぼ同じ内容を、僕はゆっくりとヤマダくんに聞かせた。だけど彼は、

「嘘だ！　一緒に住んでてなんともないなんてことないだろう！」

「だからそれがマジなんだってば……」

ああなんかもう、面倒臭いなあ、こいつ。マジなもんはしょうがねえだろうよ。

実際、僕とアイカさんとの仲はなんにも変わってはいなかった。起きて朝食を作って学校へ行って帰ったら晩ご飯を作って風呂へ行って寝て振り出しに戻る。それだけ。簡単ですね。

でも、とヤマダくんは僕に尋ねる。

「お前、楽しいだろう？　その、なんとかさんってのと生活すんのが」

「……」

楽しい？　アイカさんとの生活が？　それは

そのとおりなのかもしれない。確かに、ここしばらく、僕はとてもいい気分で生活が出来ていた。その要因の一つにアイカさんの存在があることを否定できるんだけど材料を、僕は持ちあわせていなかった。

アイカさんが僕の家に移り込んできて、ひと月以上が経過している。こんなに長い期間を過ごしたのは、初めてのことだった。今

までは、二、三週間で「依代」を見つけて、その男の家へと消えてしまっていたから。

でも　今回は、そんな様子はない。だから、僕は思うのだ。

「……ぶっちゃけ、結構楽しい」

ひよつとしたら、このままアイカさんはいつまでも僕の側に居てくれるんじゃないか、なんて。

「死ね！　人生を満喫している奴は俺の敵だ！　くたばれ外道！」

ヤマダくんは僕の頭を思い切り叩いた。外道はどっちだ、なんて思ったけれど、何故だか気分がよかったので、許してやることにした。

「大丈夫だよヤマダくん。きっといい人と出会えるよ。いつか」

「死ね！」

よく心のこもった死ねだった。七十点くらいならあげてもいい。

だけど実際、僕は随分と気分がよかった。なんてことのない普通の生活。僕と彼女の現状を表すとしたらまあそんなところになるのだろうけれど、しかしそれが僕にとってとても気持ちのいいものであるということも事実だった。

人間ってのは随分とおめでたい頭をしているよなあ。ほんの些細な幸せで、それまでの辛いことをすっかり忘れて馬鹿になれるんだからよ。以前読んだ漫画にそんなことが書いてあった。その通りだと今は思う。

そう。僕はすっかり馬鹿になってしまっていたのだ。

だから。

だから、すっかり失念してしまっていたのだ。

不幸とか失意とか、そういったものはこちらの意思なんてお構いなしに、それこそそこかしこにぽっかりと深く暗い穴を開けていて、そして僕たちはそれにあっさりと吸い込まれてしまうのだということ。

ヤマダさんと別れて、街の中心から一本裏に入った道を歩いていくときのことだ。人通りの少ないその場所の反対側から、アイカさんが歩いて来るのが見えた。おやまあ、なんて偶然だろう。恥ずかしい話だが、こんな小さな出来事でさえ、僕の心は軽やかな、楽しいビートを刻んでしまふのだった。

だけど。ああ、ただけだけどだけど！

声をかけようとした僕は、しかしすぐに近くの電信柱に身を潜める羽目になった。何故か。理由は簡単だ。

アイカさんの隣に、男がいた。それほど詳しく見ていたわけではないが、なかなか上等そうなスーツを着ていた。

そんな彼とアイカさんは、なんとも親しげに、腕を組んでいた。

そして　ああ、そして！

二人は、笑っていた。男の方は楽しそうに。けれどアイカさんの笑顔は、普段僕に見せるような、快活なイメージのものではなく。

間違いなく、「女」の物だった。

いつの間にか流れたした汗が、僕の背中や首をじっとりと湿らせ、随分と不快になった。

僕は、怖くなっていた。どこのなんという奴かもわからない男に、アイカさんが笑顔を見せていた。僕に見せたことのない種類の。

なんで、なんでだなんてそんな、だって、僕は、一緒に住んでいてそれなりの付き合いでだけそんな顔を見たことなんてなくてだからねえアイカさんなんてどうしてだれですかそいつはどんな間柄なんですかちよつと待つて置いて行かないでどんななんで彼とはなんでどういうなんで関係なんですか教えて説明してねえなんて言うてくれないんだわかないじゃないか見えてるだろう僕がそうですね違うんですか見えないんですか僕が見えないんですかそうなんですかええでも僕は見えてますよあなたが見えていますよ今だって今だって今だって！

電信柱から飛び出した。後のことなんて少しも考えていなかった。とにかく、アイカさんの前に出ていって、ということしか思ってい

なかった。

だけど、駄目だった。

僕が飛び出したその先に、アイカさんと男の姿はなかった。

失敗だった。

すでに、どこかへ行ってしまったのだろう。

馬鹿、だった。寒空の下、道の真ん中に僕だけが、馬鹿みたいにただただ立っていた。

何故ハンバーグを作ろうと思ったのか、さっぱり覚えていなかった。ただ、自宅のドアを開けたときに手にしていたスーパリーの袋の重みは事実であり、とにかく僕は、それを受け入れなければならなかった。つまり、刻んだ玉ねぎやピーマンと共にひき肉をこね回し、フライパンで焼く、ということだ。

台所で肉をこねていると、先ほどの光景が目の前に浮かんた。

知らない男と腕を組んで歩いていたアイカさん。あの後二人は、いったいどこへ行ってしまったのだろう。僕も子供ではないので、それらしい答えを見つけないとくらい造作も無いことではあったのだが、しかしそれを認めるとそうはいかない。どうにかして脳内のもつともらしい答えを否定する材料を見つけようと必死になつてみたのだが、しかしそれを発見することはできず。

結局僕は、肉をこね続けるしかなかった。

そしてそんなことをしているうちに、僕はなんとなく理解した。

ああ、そうか。僕が今、こうして肉をこねている理由　ハンバーグを作っている理由は。

アイカさんに戻ってきてほしいからだ。

ハンバーグ。アイカさんの好きな料理の一つだ。彼女は体こそ大人であるものの、しかし舌についてはまったく子供なのである。そして、そんなことを知っている僕が、こうしてハンバーグを作っている。

戻ってきてほしいのか？　馬鹿にしたようなその声は、確かに僕



の中から聞こえてきた。まったく馬鹿だな馬鹿だなお馬鹿ちゃんだなあお前は。馬鹿でお馬鹿で、そしてどうしようもないほどにガキだ。

理解しているんじゃないかったのか？　いつかこんな日が来ることを理解していたんじゃないのか？　理解するだろう受け入れられるだろう認められるだろう。だって

だって、今までもそうだったじゃないか。

そうだそのとおりだ。今までだってアイカさんは、同じように消えていったじゃないか。なんにも言わず、なんにも知らせずに、急に消えていったじゃないか。何度もそんな目に遭っていながら

それでもお前は、薄っぺらな「希望」を抱いたのか？　だとしてらお笑いだな。嘲笑と哄笑と爆笑の大サービスだな。声を大にして言わせてもらうぞ、この馬鹿が！　なんてことをどれほど口にしたって、なんにも変わらないことはわかっている。痛いほどに理解している。だって、だってだってだって。

その声の主は、僕なのだから。

僕は僕の声によって糾弾されたのだ。自分自身に。他ならぬ、僕自身に。

畜生、畜生畜生畜生。

悲しかった。なんにも言ってくれなかったアイカさんのことが。悔しかった。

それでも微かな「希望」を胸に秘めていた自分が。

だけど。

それでも僕は、肉をこね続ける。

なぜなら、ハンバーグはアイカさんの好物だからだ。

結局、アイカさんが帰ってきたのは、日付がすっかり変わってか  
らだった。

「たっだいまー！」

「……近所迷惑ですよ」

帰ってきたアイカさんの口から出た声に対して、僕はテンプレートの通りの注意をしたけれど、しかしそれが無駄であろうということを瞬時に理解した。

アイカさんはすっかり酔っ払っていた。みずー、なんて言う彼女の顔には笑顔が浮かんでいて、だけどそれは僕にとって不快なものでしかなかった。何故だろう。笑っているのだからいいんじゃないの、という疑問が浮かんだが、それに対する明確な答えは出せない気がしたので、とりあえず僕は台所へ向かい、コップに水を汲んで玄関で座り込んでいるアイカさんに渡した。

「あ、こりやどうもすいませんです」

「……べつにいいですけど」

君はいい子だねえ、なんて言いながら、アイカさんは僕の頭を撫でようとして立ち上がった。だけど泥酔と表現していい状態の彼女にそのミッションは難しかったみたいで、

「うわ、っと」

「あぶな」

ふらふらと転びそうになったアイカさんを、僕はどうにかして支えようとしたのだが、しかしその試みはうまくはいかず。

僕たちは二人で倒れこんでしまった。

アイカさんが下。僕は上。

驚いたようなアイカさんの目を見ながら、僕は心の中で呟く。

なんか、押し倒してるみたいだ。

アイカさんの吐息に含まれているのであろうアルコールの匂いに混じって、柔らかないい香りが僕の鼻孔をくすぐる。そうか、これがアイカさんの匂いなのかと僕は理解した。

「ね、ねえ……」

「あ、すいません」

声をかけられて我に返った僕は、今すぐにどきますからなんて言いながら体を起こそうとした。

「……どうかした？」

僕の動きが止まったことを不審に思ったのだろう、アイカさんが声をかけてきたけれど、しかし僕はそれに答える気にはならなかった。

見つけてしまった。見なくていいものを、見ないほうがいいものを、見つけてしまった。

アイカさんの細く白い首。そこにこっそりと付けられた、ほんのりと赤い「跡」を。

ついてないなあ、と思った。

こんなもの、気づかなきゃいいのに。

だけど僕は気づいてしまった。見てしまった。理解してしまった。さてどうしましょう。

「……ねえ、ちょっと」

いい加減にどいて、というアイカさんの言葉に、僕は口を開く。

「……今、唐突に思ったんですけど、」

「……なに？」

アイカさんにとって、僕ってなんなんですか？

「……え？」

アイカさんの顔から、笑みが消えた。僕が、消したのだ。

我ながら馬鹿な質問だと、そう思う。だけど聞かずにはいられなかった。

アイカさんの首に目をやると、そこにはやっぱりほんのりと赤い跡が付いていて、だけどそれを付けたのは僕ではない他の人間で。

そういえば、帰り道で見た、アイカさんの横を歩いていた男は、いったいどんな顔だっただろう。もう思い出せない。

アイカさんは、ずっと黙ったままだった。口を開かず、ただ僕を見ていた。そんな彼女を見ているのが辛くなった僕は、

「……なんでもないです。すいません、変なこと聞いて」

ハンバーグ残ってるけど、食べるんなら焼きますよと言いながら、体を起こそうとした。だが。

いいよ。そんな声と共に、僕は左腕を引っ張られ、再びアイカさんを組み敷くような体勢になってしまう。

「いいよ」

もう一度、アイカさんが言った。

「な、なにがですか」

「好きにしていよいよ」

普段のアイカさんとはどこか違う、艶めかしい声と、それに混じって僕に届くアルコールの匂いが、思考をぼやけさせる。

「そういえば、君にはお礼らしいことをしたことがなかったものね」

「やめてくださいよ……」

アイカさんは僕の右手を掴み、

「私じゃ嫌かもしれないけど、

そして彼女は、

「いいから、

自らの胸に、

「私は、

僕の手を、

「やめろって言ってるだろう！」

まさに触れようとしたその時、僕は彼女の手を振りほどくことに成功した。

「ふざけんなよ！」

おいおい夜中に大声を出すな近所迷惑だろうがと静止する声が脳内から聞こえたが、構うものか。

僕は怒っているのである。自分でもよくわからないけれど、激怒しているようなのである。

「あんた、誰にでもそういうことするのかよ！」

悲しかった。目を背けようとしていた事実を、無理やり目の前に突きつけられてしまったような、そんな気分。

ただただ悲しく、そして腹が立って、だから僕はもう一度言う。

「ふざけんなよ！」

僕の言葉を全身で受け止めたであろうアイカさんは、暫しの沈黙の後、

「……ごめんね」

そう言って立ち上がり、

「ごめんね」

そう言って靴を履き、

「……ごめんなさい」

そう言って外へ出て行った。

ふと思った。これで終わりなのだろうか、と。

「……知るかよ」

そう言いながらも玄関を開けてみたのだが、そこには既にアイカさんの姿はなかった。

目を開けたとき最初に抱いたのは喪失感で、その次に深い深い絶望が僕を襲った。

いなかったのだ。僕の隣の布団に、アイカさんの姿はなかった。ひよっとしたら目を覚ましたときアイカさんが帰ってきているんじゃないか、昨晚僕が抱いたそんな希望は、見事なまでに木っ端微塵に打ち砕かれてしまいましたとさ。ああなんて　不愉快な話だろう。

だけど。目覚めて時間が経過してくると、頭もだいぶはつきりしてきたのか、あることに気づいた。

何故、僕はこんなにも落ち込んでいるのか。

よく考えればおかしい話なのだ。今までだってこんなことはあったのだ。ふといなくなってしまう、そんなことは既に経験済みなのだ。では、何故？　何故今回に限って僕は、こんなにも落ち込んでいるのだろうか。

それは、

僕はもつともらしい答えを考えたのだけれど、しかし数分かつてもそれを見つけることはできなかった。そのことが、妙に腹立たしかった。

「……むかつく」

そんな言葉を口にするのは、随分と久しぶりだった。むかつく、むかつく。堰を切ったように、その言葉は僕の口から紡がれていく。「むかつく、むかつく、むかつく。むかつくんだよ　アイカさん。」

だけどそんなことを言ってみたところで、やっぱりアイカさんは帰っては来ず。

結局、僕はそれから間もなく、終業式へ向かう準備を始めるのだった。

だいぶ格好悪い、と思った。

学校へと向かう道でのことだ。

普段は気に留めない電信柱の影や、細い路地の奥。そんな場所が、今朝はどうしてか妙に気になり、ついつい足を止めてそちらを見てしまふのだった。もちろんその先になにか面白いものなんてのはなく、あるのはせいぜい捨てられた空き缶や、茶色のボロいスリッパくらいのものだった。

何故だ。なんで、そんなものを見る必要がある？ そう考えてみると、答えを出すのは簡単だった。簡単で、そして自分が随分と恥ずかしく感じられて、僕はもう、その場で寝転がってごろごろと転がりまわりたくなった。全身がむずむずしてしょうがなかった。

要するに僕は。

探していたのだ。

アイカさんの姿を。

「ばっかじゃねーの」

口に出してみた。そうだ。そんなことを考え続けるなんて、馬鹿げている。そんなことのために足を止めるだなんて、本当の本当に馬鹿だ。意味が無いぞ意味が無いぞ意味が無いぞ！

そんなところにアイカさんはいない。彼女は電信柱の影に蹲っていないし、細い路地の奥で笑ってなどいるはずがない。わかっているわかつている。わかっていますよ僕だってそこまで馬鹿じゃないんだそれなりに現実的な思考を持ち合わせているんだ。

だけど。だけどそこまで理解していてもなお

僕はやっぱり、電信柱の影や細い路地の奥に目をやってしまったのだった。

お馬鹿さんだなあ！ そうやってお前はなにを願う？ 彼女が、アイカさんがそこにいることを望んでいるんだろう？ いるはずがないってわかっているのに、理解しているのに、それでもお前は僕は願っているんだろう？ そんなのは

「随分と、間抜けじゃあないか」

「間抜けな顔してんなあ」

僕の顔を見るなり、ヤマダくんはそう言って笑った。

「そう、かな」

「なんかいいつにもまして馬鹿みたいだ」

はははまいったなあ。そんな僕の声はとても乾いていて、少し怖くなった。

けれどヤマダくんは特にそういった感想は抱かなかったらしく、  
「今日で二学期も終わりなんだからさ、最後くらいしゃきつとしろよ」

そしてポンと背中を叩かれた。その瞬間、何故だろう、僕は少しだけ心が軽くなったような気がした。昨晚からずっと、タングステンのようだった心が、鉛程度にはなったような、そんなふうに感じたのだ。そして同時に、それほど深く重くアイカさんのことを考えていたのかということに今更ながら気づき、無性に叫びだしたい気持ちになる。けれど学校の廊下でそんなことをしたら周りの同級生たちから白い目で見られるのは確実だろうし、そうはならなかったとしても、誰かが気を利かせたつもりで、おいおいどうしたいきなりそんな大声を出して、なにか辛いことがでもあったんなら話してごらんよなんて言いながら肩をポンと叩いてきたりでもしたら、その人物の性別にかかわらず殴りつけてしまおう確信があった。それはまずいとてもまずい非常にまずい。

なので、叫ばないことにしました。

当たり前ですね。

ただどなにかしないとどうにも落ち着かなかったので、自分の頬を思い切りつねってみることにした。

右手で右の頬をつねる。普段あまり体験することのない種類の痛みが僕を襲う。だけどそれは今の僕に平静をもたらしてくれるらしく、なんだか気持ちいいような気すらした。それはそれでやばい気



がするけれど。

「なにやってんの」

それまで僕の行動を見ていたヤマダくんが、気味の悪い物でも見るように僕に尋ねた。

「ひりよんなきよとぎやてゆみやつてりゆんでやよ」

「あ？　なんだって？」

僕は頬から手を離し、もう一度言った。

「いろんなことが、つまってるんだよ」

僕が考えるに、始業式や終業式での校長の話には、僕達生徒に対する恨みがこもっているんだと思う。

これから長いこと休みですか羨ましいなあ死ねばいいのについていか何人が死ね！　っていう校長以下教職員の方々の恨みがこめられているから、こんなにも長いこと僕達を立たせたまま話をしていくんだらう？

なんてことを、今までなら考えていたはずなんだけど。

だけど今日の僕は、そんなことを考えていなかった。そんなことにまで気が回らなかった、と表現してもいいかもしれない。

思い出されるのはアイカさんのことばかりで、そんな自分がとても格好悪い、みつともない存在のような気がして、それを否定するためににか他のことを考えようと努力してみるのだが、しかしそれでも、気づけばやっぱり彼女のことはかり考えてしまっているのだった。

式が始まって何度目かのため息をつきながら、まるで病気だなと僕は思った。それもとてもたちの悪い、不治の病だ。どうすればこの症状が改善されるのか、今の僕には皆目検討もつかない。なぜこんなことになっているのだろう。まったく不思議だ。

これも全部、あの人が悪いのだ。そんなことを思った瞬間、彼女の後ろ姿が僕の目の前に現れる。それはほんとうに目の前にアイカさんが立っているみたいで、僕は思わず手を伸ばしてしまう。

だけど、同時に理解しているのだ。その姿に触れることはできないのだと。だって、僕の前に立っているのはアイカさんなんかじゃなくて、同じ制服を着たカトウくんなのだから。アイカさんが、こんな場所に現れるはずがないのだから。

長い長い　　いつてもそれは体感の話で、実際には四十分間ほどだったのだが　　終業式が終わり、教室へと戻った僕達生徒を待っていたのは、担任からの通知表の配布であった。生徒一人一人が名前を呼ばれ、廊下で紙を受け取る。

「次　コノウチ」

名前を呼ばれたので、席を立て廊下へと向かう。

ストープによって暖められた教室から一步外へ出ると、思わず体が震えそうになるほどの寒さが襲いかかってくる。どうにか耐えながら、僕は先生の前に立った。

「まあ、あれだ。よく頑張ったと思うよ、うん」

俺が学生だった頃はこんなにいい成績をとったことなんてなかったからなと笑いながら先生が差し出した紙には、教科名の横に数字が印刷されていた。それにざっと目を通した僕は、なるほど確かにこれはいい成績かもしれないと納得した。

十段階評価で七以下はなし。一学期に三が記されていた生物の欄には八の数字が入っていた。

「突然ですまないがな」

そう前置きしてから先生は、コノウチは進路をどう考えているんだと尋ねてきた。

「進路……ですか」

「そう。お前、たしか進学希望だったよな？」

「ああ、はあ、まあ……」

はいそうです。そんなふうに断言することは僕にはできなかった。確かに僕は、四月に配られた進路希望調査の紙に「進学希望」の欄に丸を書いたし、九月の末にあった進路先別の見学会でも大学コ―

スを選んだけれど、でもそれは、明確な目的とか、志望校とか、そういうものがあつてのことではないのだった。

なんとなく、想像できないのだ。将来の自分の姿が、脳裏に浮かんでこないのだ。

確かに、何十年も先の姿を想像しろというのは難しいかもしれない。でも、例えば高校を卒業したそのすぐ後のくらいなら、誰だつて少しは思い浮かべることはできるだろう。たぶん、それが普通なんだと思う。

でも、僕は。

そういったことがまったくできない。少しおかしいと自分でも思う。

そんな僕がかるうじて思い浮かべることができるのは、孤独な自分の姿。

いつまでも一人でアパートに佇む、自分の姿だけだった。

ほんとに、どうかしてるな」

「うん？ なにか言つたか？」

いつの間にか声が漏れていたらしく、先生は不思議そうな顔で僕を見た。

「いえ、なんでも」

「とにかく、今言つたように、この成績なら国立だつて目指せるから、まあ頑張れつてことだ」

「ありがとうございます」

へえ、今そんなことを言っていたのか。そんなことを思いながら、僕は軽く頭を下げた。すると、先生は僕の頭に手を置いて、ポンポンと軽く叩くのだった。

「なんですか？」

今まで先生からそんなことをさえたことがなかったので、不思議に思い、頭を上げてから尋ねると、

「うん、いや、頑張つたなあつてさ」

「はあ？」

そこで先生は声量を小さくして、

「……ご家族のことか、な」

俺はそうはできなかったから、と彼は続ける。

「俺も、両親を事故で亡くした」

そんな突然の告白に、おいおいこりゃあいつたいどんな反応をすればいいんだいと軽くパニックに陥った僕は、

「ご……ご愁傷さまです」

とんちんかんことを言ってしまった。

「はっは。面白いなあまえは」

そう言ってもらっても、それはなんの救いにもならず、僕はだいぶ恥ずかしくなった。そんなことを知ってか知らずか、とにかく先生は話を続ける。

「……だけど、俺には妹がいてな。一つ下で血は繋がってないんだけど、結構口が悪くてさ。キツツイことを言ってきたりもするんだけど」

「はあ……」

相槌を打ちながら、僕はこの話がどんな方向へ向かおうとしているのか、さっぱり掴めずにいた。寒いから早く話を終わらせてほしい、なんてことすら思っていた。

しかし、先生の話は続く。

「まあ、妹が居たぶんだけ、コノウチよりはマシだったのかな……」

その弦きは僕にはなく先生自身に大して向けられていたような気がした。

「母さんが再婚してな。それで父親と妹ができたわけなんだけど、どうにも馴染めなくてな。その父親とはそれほど仲が良かったわけではなかったんだが」

先生はそこで一度言葉を区切り、数秒後にようやく、

「それでもな。二人が死んだ時は、どうしようもなく辛かった」  
言った。それは、頑張って頑張って、ようやく搾り出したというふうな声だった。

「あの時はほんと、自分でも不思議なくらいに塞ぎこんだよ。どうやって生きていけばいいのかわからなくなったんだ」

一時は死ぬことを真剣に考えた、命を絶つという選択肢がとても現実的なものとして目の前まで迫ってきたのだと先生は教えてくれた。そして、だけど勇気がなくて実行できなかったとも。

「結局俺は、何の目的もなく、学校にも行かず、ただ呼吸しているだけ、みたいな生活をしばらく続けたわけだよ」

そんな先生を救ってくれたのが、妹さんだったのだという。

「ただのちんちくりんだと思っていたんだけどな。でもあいつは、一生懸命生きていた。家事を全部こなしてくれた」

そして、ある時。

「思いつきりぶん殴られたんだ」

「……は？」

思いがけない話の展開に、僕は思わずそんな間抜けな声を出してしまう。

「ある日の朝な。寝ていた俺に馬乗りになって、それはもうぼっこんぼっこんと」

先生は、自らの両こぶしで両頬を殴りつけるジェスチャーをした。「まあいきなりそんなことをされたもんだから、俺としては腹も立ったわけだよ。それで妹をどかそうとしたんだけど」

できなかつたよ、と先生は笑いながら言った。

その時妹さんは、泣いていたそうだ。両方の目からぼろぼろと涙を流し、そして言った。

いつまでこんなことをしているつもりなんだ、と。

もうやめてくれ、と。

「……二人の分までちゃんと生きろって、そう言うんだよ。泣きながら」

先生が言うには、あの瞬間、目が覚めた、らしい。

「妹がいなきゃ、俺はきつとこうして先生としてコノウチと話すこともなかっただろう」

俺が言いたいの、つまりこういうことなんだと先生は続ける。

「俺は妹に救われた。お前はどうか？ そんな存在はいるか？」

「……僕は」

真っ先に脳裏に浮かんだ顔があった。

アイカさんだった。

でも、

「……僕は、」

いる、と答えることができなかった。だって、アイカさんは、もう、

「居ないなら、これから見つければいい。もし居るんなら、

その人を絶対に放すんじゃない。その言葉を聞いた瞬間、心臓をぐりつと掴まれたような気がした。

「死んでも放すな。かじりついてでも放すな。いいか、絶対に放すんじゃない。しょうがない、なんて諦めるなよ、中途半端に諦めるなよ」

放さなければ。その人を放さなければ、きっと大丈夫。お前は大丈夫。そんなことを先生は言った。

「話はそれだけだ。長くなって悪かった」

「いえ……」

軽く礼をしてから、僕は教室に戻ろうとした。が、一つ聞いておきたいことが思い浮かんだので、もう一度先生に向き直った。

「一つ、聞いてもいいですか？」

「ん？」

「先生は、

妹さんのことが、好きなんですか？」

先生は暫しの間面食らったような表情を浮かべたけれど、その後すぐに、

「好きだよ。大好きだ」

「……そうですか」

今度こそ僕は先生に背を向けた。廊下は寒いはずなのに、何故だ

ろっ、体の中が妙に熱かった。

穏やかな日差しの下を、自宅に向けて歩く。もうすぐ一年が終わる。そんな空気が色濃くなってきた街では、どことなく道行く人々の歩き方も忙しく見える。

手をつないで歩く高校生らしき男女とすれ違った。きっとあの二人は付き合っているのだろっと思っただ。どちらかがどちらかに、あるいは両方が同時に自分の気持ちを伝えた結果がつまり、手をつないで歩くような関係となっただということなのだろっ。

自分の気持ち。

先生の言っただことを思い出す。

僕のことを、救ってくれる存在。

もしもそんな人が居るのであれば。

死んでも放すな。かじりついてでも放すな。いいか、絶対に放すんじゃない。しょうがない、なんて諦めるなよ、中途半端に諦めるなよ。たしか先生はそう言っただ。

救ってくれる存在。心当たりがないわけではなかつた。というか、

「ほんと、我ながら簡単というか……」

アイカさん。彼女の顔が浮かぶ。

ひよっとしたら、そうなのかもしれない。彼女こそが、僕を救ってくれる存在なのかもしれない。

だけだ。だけですね。

彼女はいつまでも僕の前に居てくれるわけではない。いつかまたどこかへ行ってしまっるのは分かつていて、そして僕は、そのことをなんとなく受け入れている。いや、

受け入れて、いた。

語尾の一字が変わっただけでなにがどうなるってわけじゃないというの僕にだってわかる。きっと大きな変化は得られない。でも。

もしかしたら、なんて。

そんな小さな希望を抱いてみるのも、まあ、たまには悪くないような気がした。

ガラじゃない、とは思っただけだよ。

気づけば僕は、全力疾走とまではいかないものの、十分小走りと言える速度で自宅へと向かっていた。

もし、もしも帰って見たらアイカさんが待っていてくれたとして、そうしたら僕は

アパートが見えてきた。ポケットから鍵を取り出す。大した速度で走っているわけでもないのに、心臓の音が妙にやかましかった。

部屋の鍵は既に開いていた。僕は朝たしかに鍵を閉めたはずだ。そして僕以外にこの部屋の鍵を持っているのはただ一人だけ。ということはつまり

「アイカさん！」

僕は、おそらく室内に居るであろう人物の名を半ば叫びながら、靴を脱ぎ捨てた。

だけ。

居なかった。彼女の、アイカさんの姿はどこにもなかった。トイレや押入れの中までしっかり探してみたけれど、しかしそれでも、アイカさんを見つけることができなかった。

だけど、発見したものもあった。

部屋の鍵と、封筒だった。それはテーブルの上にぽんと置かれていて、封筒の中の便箋にはきれいな文字でこう記されていた。

「お世話になりました。

直接挨拶もせずに出て行くことをお許しください。

君にはだいぶ世話になりました。いつもそうだけど、今回は特にそう感じます。

君に下着を選んでもらったりとか、一緒にカラオケへ行ったりとか、そういう今までできなかったことができたというのは、とても



良かったと思います。君はどうだったかわからないけれど、少なくとも私はすごく楽しかった。

君の作る焼きそばが、私は好きです。

だけど、もうそれを食べることもないかと思うと、少しさみしいです。

私はもう、ここへは戻ってきません。

あんなことをして、ごめんなさい。

だけど私には、あんなお礼しか思い浮かばなかったのです。

私は、知らないうちに君を傷つけていたのかもしれない。苦しめていたのかもしれない。

気づくのが遅くてごめんなさい。だけど、もう大丈夫です。だから私は出ていくのです。

今までありがとう。

最後のお願いです。

どうか私のことは、すべて忘れてしまってください。

そして、君の人生をしっかりと歩いて行ってください。

それが私の願いです。

ばいばい。」

「……………」

落ち着け、と僕は心の中で念じた。こういう時はできるだけ冷静に考えることが必要なのだ。その「こういう時」ってのがどういう時かっていうのは、つまり今この瞬間のように体の中がぐつぐつと音を立てているみたいに熱くなっている時のことだ。

「ふざけんなよ……………」

すごく楽しかったとか、焼きそばが好きだとか、そういうことを書いておきながら、その文の締めめに、「忘れてしまってください」「だと？ そんなこと

「ふざけんなよ……………」

今度の呟きは、自分自身に対してのものだった。君のことを傷つ

けた、なんてことをアイカさんは書いていたけれど、でも、そんなことを思わせてしまったということはつまり、僕もアイカさんを傷つけてしまったということなんじゃないのか？

きつと、そうだ。そうに違いない。便箋の所々にある、濡れたような跡を見ながら、僕は確信した。この跡は、きつとアイカさんの涙によってできたもののだろう、と。

想像した。アイカさんが涙を流しながら、便箋に文字を記している姿を。それはとても悲しく、そして腹の立つ光景だった。

「ふざけんなよ……」

便箋の濡れた部分に触れてみると、そこはまだ湿っていて、だから僕は、しつこいようだけれどもう一度そう呟き、そして玄関へと踵を返すことにした。

靴を履き、再び寒い外気に身を晒す。少し迷ったけれど、玄関の鍵は開けたままにしておくことにした。別に盗まれて困るようなものは無いし、それに

もしもアイカさんが帰ってきたとして。その時に鍵が閉まっていたら、可哀想だろう？

まあ、そんなことはないのだろうけれど。今の時点では、アイカさんが再びこの部屋へと戻ってくることはないのだろう。そう、「今の時点では」。

だから。だから僕は動く。歩いたり走ったりして、アイカさんを探す。アテなんてものはないに等しいけれど、それでも動いてやる。そしてどうにかしてアイカさんを見つけて、そして

その後のことは、その時考えるさ。

死んでも放さない。かじりついてでも放さない。絶対に放さない。中途半端になんて、諦めてやるもんかよ。

師走の風は寒い。

僕がいつも利用している銭湯、「金の湯」の前へたどり着いたときのことだ。

「あれ、コノウチ」

息を切らせて走っていた僕は、背後から聞こえたその声によって立ち止まることとなった。

「ああ、ヤマダくん、か」

「なんだなんだ、なんでそんなに息を切らせてるんだお前は」

しかも制服姿で、とヤマダくんは、不審そうに僕を見る。これにはいろいろと事情があつてだねなんて説明すると、

「へえ、まあいいけどさ」

そんなことより、と彼は、なにかを思い出したような口調になった。

「さつき、お前の彼女さんと会ったぞ」

「彼女……？」

僕に彼女なんていう存在はいない。それは本人である僕が言うのだから間違いないのだが、しかしヤマダくんは少しの迷いもなく、「彼女さん」と言った。つまりヤマダくんは、その人物のことを僕の彼女であると認識していると、そういうわけである。

ではいつたい、その人物とは誰なのか？ 答えを導き出すのは、わりと簡単だった。

おいおい昨日の綺麗なお姉さんは誰なんだよ。

お前はあれだろう、この間一緒にカラオケに来てた可愛いお姉さんと一緒にクリスマススを過ごすんだろう？ 聖夜を性夜にしちまうんだろう！ まったくもう、聖闘士星矢！

ヤマダくんの過去の発言が、瞬時に脳内で再生され、そして僕は呟いた。

「アイカさん……」

「ああそう、その、アイカさんだよ。その人とな　って、うお！　気がつくと僕は、ヤマダくんの胸ぐらを掴んでいた。な、なんだいきなり、俺がなにかしたかよという当惑したようなヤマダくんの声には答えず、僕は尋ねる。

「どこで？」

「は？」

ああもう、じれったい。

「アイカさんとどこで会ったんだよ！」

自分自身が一体どんな表情を浮かべているのか、今の僕には知るすべはないけれど、少なくともヤマダくんを圧倒するくらいの迫力はあつたらしい。

「この先の十字路……、ほら、郵便ポストのある……」

怯えたような声で、彼がそう教えてくれた。

「どんな様子だった？」

「どんななつて言われても……」

普通だよ、いや、普通ではなかったかと、いったいどっちなんだかよくわからない返事を得た。

「たまたま目が合つてさ。向こうから声をかけてきたんだ」

そして、アイカさんはこう言っていたという。

「あの子をよろしくね、だつてさ」

あの子ってのはお前のことかと尋ねられたので、たぶんそういうことだと思つと返す。

なあ、お前ら喧嘩でもしたのかと心配そうにヤマダくんが言った。なぜそう思ふんだいと聞くと、

「どっちも悲しそうだからさ」

「悲しそう？」

「ああ」

さつき会ったアイカさんも、目の前にいるお前も、どっちも同じような顔をしているのだとヤマダくんは教えてくれた。そして、俺はそういうのが嫌いなのだ、とも。

「やっぱさ、人間ニコニコして生きているのが一番いいんだと思うわけよ」

もちろん、生きていれば辛いことや悲しいこと、腹の立つことはもちろんある。だけど、

「それでも、さ。やっぱり俺は、出来る限りニコニコして生きてい

きたいし、他の奴等もそうであつたらいいなつて思うわけだよ」

そしてヤマダくんは僕の肩をポンと叩き、

「ちゃんと仲直りしろよ？」

「……ヤマダくん、僕とアイカさんは別に喧嘩をしているわけではなくってですね……」

え、そうなの？ そんな驚きの声を上げたヤマダくんは、なにかを考えるような仕草を見せてから、

「でも、アイカさんは悲しそうな顔をしていた」

だから、お前が笑顔にしてやれ。そんなことを言うのであつた。

「僕が？」

「当たり前だろう？」

同居人なんだから。

「まあ、ありがちっちゃありがちですよね」

そう呟いてから僕は、そういえば前にもこんなことがあつたなあと思ひ出す。

まったく同じ言葉を。

まったく同じ、この場所で。

冷たい空気。無機質な遊具。点滅を繰り返す街頭。

僕とアイカさんが初めて出会つた公園だつた。

「もつとこう、ひねれないもんですかね」

なあ、アイカさん。僕はベンチに座る女性に後ろからそう声を掛けた。

女性が立ち上がり、そして勢い良く振り返る。ああ、やっぱり、

「やっぱりアイカさんだ」

「……なんで、ここに」

そう呟くアイカさんの目は、信じられないものでも見ているようだつた。

「ま、いろいろありましてね」

言いながら、頭の中にヤマダくんの顔が浮かんできた。彼にはき

ちんとしたお礼をしなきゃいけないな。だって、彼のおかげでこうしてアイカさんと顔を合わせることができたのだから。

「まったくもう」

どっか行っちゃうんだったら、さっさと行ってしまう方がいいんですよ。僕のその発言に、アイカさんの顔が悲しそうに歪んだ。しかし僕の言葉はまだ終わっちゃいない。

「でもまあ、

見つけられてよかった。

言い終えて、僕はアイカさんの小さな体を抱きしめる。

とにかく、アイカさんに触れたかった。

先程まで冷たい風によって攻撃されていた体が、アイカさんを抱きしめることによって一気暖まっていくのがわかる。彼女も同じ暖かさを感じていてほしい。そんなことを僕は願った。

「ごめん、ごめんね、ごめんなさ、い」

耳のすぐ近くから届くアイカさんの声。それはいつもよりずいぶん震えていて、彼女が泣いているのだということを知った。

「泣かないでください」

そして謝らないでくださいとも頼んだ。僕にだって謝らなければいけないことがたくさんあるのだ。

「ごめんなさい。昨日　じゃなくて、あれは今日か。追いかけれなくてごめんなさい」

どこで夜を明かしたのかと尋ねると、アイカさんは、行くアテなんてなかったから、ずっと歩きまわっていたと答えた。

「……寒かったでしょう」

「いっぱいだよ、はなみず」

へへへ、とアイカさんは笑う。そして僕は、そんな彼女がとても愛しくなって、抱きしめる力を強めた。

「僕は、きつと嫉妬していたんです」

昨日の帰り道、アイカさんと知らない男が一緒に歩いているところを目撃してしまったのだということを、僕は告白した。

「それで、アイカさんなかなか帰って来なかったから、あの男と一緒なのかと思ったら、なんか、腹が立って……」

言っているうちに、なんだか泣けてきてしまった。恥ずかしいなあまったく。まるでガキみたいだ。

「っていうか、まるつきりガキじゃない」

アイカさんからの鋭いツツコミに、僕はなにとも言えなくなる。

「でも、」

そついう君が好きだと、アイカさんは言った。

「私は、ずっとごまかしてた」

「……どういうことですか？」

疑問を口にしながら、僕はアイカさんから一旦体を離れた。再び冷たい風が僕に牙を向く。

「何回も君に世話になっているうちにね、気づいたんだよね。」

「ああ、私はこの子の子のことが好きなのかもなあ、ってさ。」

「だけど、それを認めることができなかった。」

「だって、君はまだ子供だもの。」

「そんな相手を好きになるなんてどうかしてるって、そう思って」だから、アイカさんは必死で僕から離れようとしたのだという。

「だけどね」

駄目だった、と彼女は笑う。

「名前も知らない男の人のところに転がり込んで、一緒に暮らしてだけどね、そんなのは長くは続かないの。それで、

気づいたら、僕の家へと戻っている。

もう無理だ、とアイカさんが言った。もう隠すのは無理だから、思い切って言っちゃおう、と。

「私は、君が好きです。」

「なんだか変に大人びてて、

「たまにすごく嫌な奴だったりするけど、

「でも、すごく真面目で、

「料理もそこそこ美味しくて、

「そんな君のことが、好きです」

一言一言が、僕の体へと突き刺さる。冷たい風と共に僕へと放たれたその言葉は、僕から声を奪うには十分な威力を持っていた。

なにも言わない僕を見て不安になったのか、アイカさんは怯えたような目をしながら、

「駄目、かな」

そんなアイカさんを見て、とにかくなにか言わなきゃいけないと思った。だって今のアイカさんは笑顔じゃない。そんなのは駄目だ。こういうシーンではヒロインはニコニコ笑っているもんなんだ。

そうだろう？

だから僕は口を開く。

「さ、」

「さ？」

「先に、言わないでくださいよ……」

「え？」

なにが、とアイカさんは首を傾げる。そんな彼女に向けて、僕は言葉を続けた。

「好きです、とか、そういうのは、

「男が先に言うべきもんなんですよ。」

「先に言われたら、締まらないじゃないですか。」

「こういう時くらい、カッコつけさせてくださいよ」

言っているうちに、なんだか恥ずかしくなってきた。なんとなく今の自分の顔は見たくないなあと思った。きつと随分と間抜けな顔をしているに違いない。

「……それはつまり、」

その先を言いそうになったアイカさんを、僕は慌てて制した。

「自分で言いますから。っていうか、言わせてください」

まったく、馬鹿みたいだ。随分前にもう答えは出ていたはずなのだ。だけど、それを僕は。持ち前の根性の無さやらなにやらで、押し殺したのだ。



いや、それも違うな。結局僕は、上手いこと自分の気持ちを押し殺した「つもり」になっていただけだ。

まったく、間抜けな話である。はなっからこうしておけばよかったんだ。そうすれば

そうすれば、アイカさんを悲しませることもなかったのに。

ごめんなさい。心の中でアイカさんにそう詫びながら、僕は口を開く。

きちんと。自分の声で。自分の気持ちを。

「アイカさん、

僕は、

あなたのことが、

「大好きです」

口に出してしまえば、あっという間だった。ほんの数秒間の出来事。そんな簡単なことなのに、僕は実行するまでその数十倍　ひよっとしたら数百倍の時間を要したのだ。

ああまったく、

「カッコ悪いですよ、僕は」

「そんなことないよ」

強い風が吹いた。髪を押さえながらそう言うアイカさんは、笑っていた。

「やっぱり、アイカさんは笑っているほうがいいですよ。泣き顔なんて似合いません」

「誰のせいで泣いたと思ってるんだ」

そりゃまあ、そうなんですけどね。言いながら、僕はもう一度アイカさんを抱きしめる。

「あったかいですね」

「君もね」

「そりゃなによりです」

笑った。僕が。気づいたら、笑っていたのだ。幸せで幸せで、体の中がなにかとても暖かいもので満たされていくのがわかった。

懐かしい。そう思った。なんだか、随分前にもこんなことがあったような気がする。だけどそれがいつなのか、はっきりとはわからない。ただなんとなく、家族皆が生きていた頃の事のような気がした。

ああ。そうか。

僕は、一人じゃなかったのか。

家族が死んで、僕は一人ぼっちなんだと、そう思った。

だけど、それは違っていて。

今まではアイカさんがいた。

そして、きつとこれから。

お父さん、お母さん。そして妹。

僕は今、幸せです。

冷たい風が、相変わらず僕らを攻撃していた。やっぱり寒いね、とアイカさんが言った。そりゃそうだ。

「じゃあ、帰りますか」

「そうだね」

じゃあ、帰ろう。

家に。

## I s s h e a p a r a s i t i c w o r m !

目を開けたとき最初に抱いたのは驚きで、その次にとてつもない不安が僕を襲った。

いなかったのだ。僕の隣の布団に、アイカさんの姿はなかった。だけど、僕とアイカさんは、昨日確かに一緒に寝たはずで、だから、

「……早く起きただけだろ」

どこか、部屋の中のどこかにいるはずだと考えた僕は、布団から這い出て、そして、

見つけてしまった。テーブルの上に置かれていた、封筒を。

「……マジかよ」

いやいやいや、これは駄目だつて。そんなオチは面白くないって。誰も見たくないって。そんなのは期待してないって！

開けてはいけない、そんな気がした。だって、開けてしまったら、その中には、とてもとても辛い現実が待っているかもしれないから。なんてことを理解しているのにその封筒へ手を伸ばす僕はどうか。らそうとうイカレてるみたいだ。おいおいおい馬鹿じゃねえのか。見たらそれだけ辛くなるかもしれないんだぞ。冷静な声で問いかけられる。わかってる、わかってるさ。だけど、でも。

なんとなく。ほんとうになんとかなくなんだけどさ。確かに不安でしようがないんだけど、実際怖くて怖くてたまらないんだけど、でも。

大丈夫。僕たちは、きっと大丈夫。

そんな気がした。

まったくどこにも根拠はないんだけどさ。

まったく、馬鹿じゃねえの。そんな問いかけに反論することはできない。自分でもわかっている。

ああ、僕はすいぶんと馬鹿だ。

そんな馬鹿は、テーブルの上の封筒を掴み。  
そして今、それを開けた。

「たぶん、これを読んでいる君は、とても不安なんじゃないかなって思います。

いきなりでごめんなさい。  
怖がらせてごめんなさい。

私は、一旦ここを出ていきます。

といっても、さようならなんかじゃありません。

いつだったか、君が言ってくれた言葉を、思い出したのです。

君は、両親に会ったほうがいい、と言ってくれました。

きつと、今がその時なんです。

突然ですが、私は両親に会ってこようと思います。

今までのことを謝って、それから、

すてきな彼がいるんだって、教えてあげようと思います。

大晦日までには帰ってこようと思います。

だから、二人で紅白を見て、そして年が変わったらすぐに初詣に行きましょう。

それを楽しみにしています。

じゃあ、行ってくるね。」

「……あー」

マジでビビった。でも、ほっとした。どうやら僕は、アイカさんに捨てられたわけではないようだ。しかしなあ。歪んだ笑みを浮かべながら、僕は呟く。

「両親に紹介って……」

これはあれですか、つまり、そういうことですか。

なんか一気に大変なことになってきたなあおい。僕はまだ高校生のガキですよ？

だけどもあ、

「いいかあ、それでも……」

自分がニタニタと気味の悪い笑みを浮かべているのがわかる。だけれどそれを直そうという気には、何故だろう、まったくならないのだった。

死んだ家族のことを、唐突に思った。みんなは、今もどこから僕のことを見ていたりするのだろうか。もしそうならば、声を大にして伝えたい事があった。

お前ら、僕が羨ましいだろう！

幸せだぞ！ 今、僕は幸せだぞ！

生きて生きて、生き続けていたら、大切な人と出会えたんだ。おっと強がりはいらないぜ。正直に言ってくれよ。

今の僕が、羨ましくて羨ましくてしょうがないってさあ！

両目からボロボロと零れ出た涙が、床にぼたぼたと落ちた。ただどそれを拭う気にはならない。

今はただ、死んでしまった大切な家族のことだけを思っていたかった。

ありがとう。お父さん、ありがとう。お母さん、ありがとう。

ああ、そして！ 僕の妹。いつも割と一緒にだった、そんな妹！

みんなありがとう。僕は随分と幸せだ。

妬ましいだろう。腹が立つだろう。自分たちは消えてしまったのに、なぜお前だけが、なんて想いがあってもおかしくはない、というかそういう想いがあって然るべきだとさえ思う。

だけど、お願いだ。

どうか、願っていてほしい。

僕が、そして、僕の大切な人が。

いつまでも、幸せでいられますように、と。

ああ、なんて自分勝手なのだろうかと自分に呆れてしまうよまったく。

不幸はどこにでも潜んでいる。何食わぬ顔でそこ此処に佇んでいて、なんの前触れも伏線もなく、突然目の前に飛び出してくる。そ

して僕らをどうしようもない悲しみの中へと引きずり込むのだ。

そんな奴等から逃げる術は、果たしてあるのだろうか？ もしもあると思っている奴が居るんだとしたら、そいつはとんでもない馬鹿であると言わざるをえないだろう。

答えは簡単だ。

そんなのあるわけねえだろうがバーカ！ そんな一言で全てが済んでしまう。

不幸から逃れる術はない。そんなことはわかっている。  
だけど、まあ。

今、この数瞬だけは、そんなどうしようもない現実から、目を背けたっていいだろう？

アイカさん。

彼女は、いつだったか自分のことを「寄生虫」だと言った。

その通りだ。今頃になってそう思う。

その虫はとてもタチが悪くて、いつの間にか僕の体の奥深くにまで入り込んでいた。

そして、気づいたときにはもう遅いのさ。

最高だね。そう思うだろう？

とりあえず、あれだ。僕はある決意を固めた。

行つてらっしゃいと言うことができなかったから、せめておかえりなさいは大きな声で。

そして、ああそうだ。

ハンバーグと焼きそばを用意しておいてやろう。

……なんてね。

## あとがき

あっという間だった、というのが正直な感想です。

これまで生きてきた中で（短編を除いて）最短の時間で書ききった作品なんじゃないかなあと思います。  
長編、と言えるほどの量ではありませんが。

僕はわりとこの作品が気に入っています。  
スケジュール帳のページに書きなぐったプロットから生まれた、そんな作品ですが。  
何故か無性に気に入っているのです。

とりあえず、冬休み中に完結させることができて、ほっとしました。

学校が始まれば、また新しい話を思いつくことができるでしょう。  
それをしっかりとした作品にできるかどうかはわかりませんが、  
今からワクワクしています。

最後に、毎度毎度思うことなのですが、  
読んでくれて、本当にありがとうございます。

2011年1月9日。  
17時10分。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0390p/>

---

Is she a parasitic worm?

2011年1月9日17時10分発行